萱葉袖草紙 下

へ 5
4469
2

門 へ 5
號 4469
卷 2
昭和九年十月一〇日 購求

芭蕉袖草紙下

浪速 花屋蕃高淵按

（元禄七年）

（芭蕉）

此本を名古屋にて拡ひらくと
三日宝口絵に記日

大は孫のそれとうゑいに仏

猿養

（芭蕉）

然るに東武より

梅の実ちりこの宵はとろけ
笠あたらしく記されおけばの　乙弧
雲荷の小西より出でる沈ぶ　珠碩
志ときに行くて下されば　素男
行隅よ出遠うそえて言ふ　弧

二階の客いたく老たる秋　蕉
故やる雛の紙ハえもいはず　男
稲の葉のひのかゞ光風　碩
蚊ゝのこゝめに敷る新藁也　蕉
内義ひとり咲て哀ハたれ　孤
和の刻の箕の子とゝ嶋小西方　碩
ゝゝたる松の青ゝ迄ゝ　男
萩の札ゝ花の札ゝ孫引て　孤
雀ゝゝよる百舌鳥一声　背尼
憐ゝ鳴あゝむる秋の月　九北
汐ゝゝまゝぬ海つゝ　孤
陰の柄ゝ立ゝゝる蕊　去来
灰まゝ花ゝ汐ゝし菜の源　北
蕊の日ゝ社参て帰る往机　正秀

庇なもの養ゝ供のゝ智ゝ来
汁ぬゝゝ湯の青ゝ一の絆の糸　半殘
ゝゝ花せゝ一花雛の下　上芳
天瞻ゝ思ひくゝつゝ改意ゝして　殘
身ハぬ生紙のゝゝのゝ不ふき　芳
小刀の蛤ふゝる網立ゝゝ　殘
掛ゝ火ゝもゝ大年の松　園風
ゝゝゝゝ思ゝたゝゝ浜浦　猿雖
胸ゝちゝハゝせゝゝゝ肩衣　殘
試夏もゝれゝ城ゝる破れ新　風
碧油ハゝさせて赤ゝ月ゝる　雖
咲声の隣ハゝ花ゝ掘ゝゝ　芳
涙ゝハゝゝ人目ゝゝくゝ新　風
死ぬき後ゝふゝひる念珠道　嵐蘭

落雪こうろ井の刻下駄　史邦

花よりとしけれども寒らん　野水

雛の法城そむるしるし風　羽紅

山里は万葉おもてーうめの花

こうろのふる雨や二葉の茶の煙

芳風まことをふる敬の琴の声　荻子

ふ性とかきおこされし蕎

重潰

山べ千家隠の結庭の匂ひ時

屋根の搭

り芳ば辺の人とを

る紅大竹糸をもる月夜

うれ糸をとひーかせ蛍

落柿舎　二句

柚の花よむしーば見ふ料理の者

五月ふやを安へけるる笠の跡

猿蓑

市中はあのふほひや夏の月　凡兆

あつしーとと門しめてふ　芭蕉

二書叫ふも家さん穂に出て　去来

灰うちたくくうるめ手紙　兆

はの筋は根もえ立ーに不自由さよ　蕉

たくとひやうしに手紙服指　来

草むくー小蛙こいるつ万葉　兆

蕗の茅とうまる行燈もり清　蕉

反人のおこうい花の匂ひ時　来

能登の七尾の冬い住うれ　北
奥は背志ふるまてれ老とへて　蕉
ものけ人入〳〵小町門の後　来
立うり屏風をたふす女子共　北
陽炎い井の簀の子俤〳〵れ　蕉
茴香の実ぬれ〳〵ふるあり　来
僧や〳〵きく寺よ仏るゝ　北
猿蓑のさらと安ぬる秋の月　蕉
年に一斗の地ふるとろふ　来
五六寸生木はけうる水海り　北
足袋ふとよと仏足はつれ　蕉
迷たてふ紀市馬の刀　来
洞市う前人あらるゝたう　北
戸陰ふもむろかの麦屋表　蕉

天下ものいつうを付　来
こそしと草鞋ぬ他る月取さ　北
蛍ぬふるひよ紀しる　秋　蕉
その中に物ひ流うれふと　来
少うて蓋の合ぬ寸　捷　北
草屋よ志〳〵く居ていあ破う　蕉
いのち城〳〵紀撰集の沈　来
ふ屋しよ品智〳〵なる兵ぬて　北
うれ世のてはふれ小町く　蕉
何ものよ粥をふるふも浸ふを　来
市沼ちとふれいふ度を抜茂　北
まれひ〳〵小虱迷をる花の陰　蕉
蕉動う枝屋のねひをを　来
刀奈美山

素うらに紙こけ出て凡の器に
世拙なる埴の吟をつるこそ 浪化
歩れ苔打まふらの人と世に 芭蕉
かこと山供のるとこそ 之道
半時ほど夜のかうたるなれ 丈艸
次のまちくしと燃てやゝ 支考
軒に鳥迄のぼる音請ふ 惟然
足身もうえをあつむる 野童
切り立て畑えうえた丹波山 野明
そろしまをうれうれ 来
寄合ハ鎌の元を抜法斗り 通
なうう嫁けし切焼のそや 艸
ちくしか風呂焚こ成こ 考
ちゝしとおよゝ春の茶 然

砂川の泊く流ふ夕月 童
寒志しれも淫ふつく 明
百ほうゝ花の本陸地 道
葉稚おほろ西城ん晴 来
此寺小撈厳ふ 草
狐場の云本れむつの 考
朝の内むとに馬城迄せ 然
鎌ほきあけて什移り 童
羽ふ板の寄て一方ある 明
僧上ふて妻ふぬる 道
案小設ふ結の十徳のを 来
ふ私さうさと秋ハ来 草
此夕ア月城北ふ取山ふ 考
ちりこ畠の吟ふかつく 然

雨降りて袖の戻りのうるおと　童

ふる里の柴さかる市の小屋掛け　明

はこころの化粧とは思ひうつして　道

身と習のふかる扶持考

所局の郷下りしてい泪くみ　艸

塗と絹ようあの出一入　蕉

花の香のたぐひやまぬうらうら　然

日ごろ一日ちるのさへぬるり　羽

俳諧集

なてるうるうるうるに拭きて
きさ家名弦弥を

ひくしとあるるあやうきれ線　芭蕉

青葉はちぢくタ立の　イ二句　安世

涼弦為に毋弦名ぶよ送て　支考

それ生て家弦造る原中　空芽

月の氣をめぐれ拾る柔て考　土龍

大ゝと宏の多弦そろへ歩く　丹埜

傘弦を用めて戻るが紀の蓋　芽

宏ゝるゝ多ゝ人の玄　伴蕉

さけてるとお弦ゝ連ゝ行　世

抜ゝ明ゝ中ゝ弦ゝ海　考

ゝ多ゝ仏弦付るゝ生して　野

玄向の風ゝ多ゝ旅と　芽

ゝゝ把るむとこの居る線上　蕉

ゝゝゝゝゝ戸の蓋ゝ引ゝ蓋ゝ　路通

多ゝ一ゝてゝひゝゝるゝ思ゝ蓋

ちゝゝの事ゝ枝ゝ節ゝ佐く

月弦弦紀の文ゝかゝこゝ

あゝ弦ゝゝゝ猫ゝゝゝ　野

石塔弦月よりそなへ今朝さを出
肯丈ケ伸たる拝きんのかふ
古久め人形仲宵ら寄てふる前
立端出して二ろい賀 うろ
絡茅小鍬をとゝえて穴ほり
名深の町の辺付もろろ
明月の旋よりてたる実赤果稲 葉文
ことゝふ人ふ浪るあらしゝ
蔭薯いちつほと待か秋雪
いつ泡りても待ハ上まろう
女房よりく実ふれ必之惜して
風えれ武士の二番くくも
土手節の茶時よりやる富士垢離 野

下六

坂の居にもろもれてふ夏の月
酒しはと名残付て春ろ
病ぬいて結句まめ茶花
ともゝへ向くもそいろんろう
俳諧集
秋立て丁凡ろ雨気れ 及肩
麦居ふゝえて名残ろを月 珠碩
早稲茶茶残をて仕共用も 之道
人ろ一立ろ辻の放下作 正秀
脂掛もさひ一くゝ田舎接 探志
をうつふれ一ふろの風 碩
番捻て転のこけらを持人 道
ろんを転の餐もたる す
居ふゝふ離炊時の中る 房

雷おちる娘こうあゆれ　秀
かけて金く合羽の糸ほこれ　道
肌さむくと博奕うつ　えろ　碩
方の新酒よせいこれ近うえ　秀
業成蔵なりと寺の雇人　志
上張は弱ぬをむ白のうけ　房
日和よむ紙一重の朝霧　肩
どりしと振抜ぬく花豊　碩
若びつれたる春の刈草　道
幅度よ砂川うろ歩さよ　志
羽織をろゆる講釈うと　肩
行うて朝起ふれる五六日　道
茶成休む淦　あの味　芭蕉
母親の仕立てこと嫁入り振袖　秀

ものさし一出る国松ふし　房
江戸店とおて年取の門つま　碩
麦成莫ろ番は咽のうきし　道
股引の方成要にせられて　志
青の小豆に若井生出る　肩
ちんしと国の伊勢屋の屋　秀
うろ成若る秋のひよる　肩
山畠の木行うとつく風の青　蕉
石地の板とうつるゑや坊　碩
情張き亀井の大工新して　道
かくれを行を京良の潜上　肩
野の度さ年しに花を捜ひろ　秀
かうしとろる春のあけぼの　碩

蠅ふらふらとやうの秋の日数れ　未来
蔓のうら吸性なるの　皺　芭蕉
小灯をさゝぬ萩をかけ移て　路通
初して来るる角の奥の　朧　丈竹
一通りえそれる墨ろ朝月よ　惟然
たゝゝゝと脊中おそる　来
寄あけて云ふ迷ぬ人と思ふ　蕉
よれはうひる出る面うけ　通
おぼしのとれかゝりて老れ　草
云そろへたる芝のふさられ　然
夕ぐれ言させる爲して立すう　来
泥うちうそれ早乙女のされ　蕉
石佛いつれ欠ぬふりふり　通
牛は骨まで牛ほらもや　草

酒の酔かそ上ふ酔ふせう　然
宮の八島はたつ逢ひつ　来
陸奥い花ふ方のさはしふ　蕉
竪の高い花ふるこちの雪　通
解ぬの友をはしむる雨　草
我小力よ志むる巻　然
お中い雅そふと宮に隠て　来
疲してとる沈の安さよ　蕉
斤定ふ拾ひ沈手の古竹履　通
あを似人と雪よ帰る　草
供ふ沈まし沈も笑ふ静也　然
烟の中よ爲る稲ふま　来
人ふ井よ熊退ふ爲板　蕉
松ふ鑿のええぬ笑けさ　通

やれしけふよりふる雨にそめ　草
所簾のあ雨にふしぬ侍　然
る親うしろ〳〵ゆうて通りけり　未
けうの中よりてをこや捕　蕉
武蔵も斤例斗りえそろひ　通
会芭ほとく落笠のう〳〵　草
併よいかゝゝのの花城奉る　然
業城ほむ製の白れ暗　未

星合集

牛部屋よ投の夢ふく秋の風　芭蕉
下撫の上よ蒲萄たかはる　路通
酒志ほる宰ふうにかられて　史邦
扇巴みれ出ふくりきり　丈草
名井に素ーるるをみ床　去来

下九

蓮のゝゝと葉のゝかろに　野童
ウ笑ひもゝと彩らしくをつれて　正秀
拾ひの楽城拾むゝとと　蕉
休ミ日も瘧ふるひの乾ふく　通
涼くむ具の隣いふせよ　邦
ふまゝ干なる裏ゝ城ほる　草
いつも嘉うゝ秋の下投　栄
秋ゝてよ一ゝゝふる付　童
落紙なくく僧堂の　秀
ふふれか城ふる筆れれ　蕉
瘧よほくゝて浮世さうい　通
蕎るゝゝてふられいぬ花の　邦
畑ふゝるくゝて若ーを　華
人人夜陰の囲いとえう　栄

産月まてもうろき　仏　童秀

う紀事城辻井よ伝る陸奥　蕉

絹　買　客のこうる衣し

紬ゑ減り除えもう業酒　通

橋咲いむうー法ふし　邦

叢ゑ麻ふうのもうり所僧　草

明石の様の太鼓出次　童

大うこいはーやくるる紅志し　秀

ちうーに仕せめ碑こひふ紀　通

ものるされて女の中け音張う　蕉

義ゑられぬ志のひ法の月　通

匂ひ水ちうくるくるて初嵐　邦

まとも鼬のこうひら逆ひ出を　草

ゑて抜ーおえ考ふえかーさ　来

油あけをぬ庭ふやせたう　童

篤の花よい麻とうふて　秀

柳を風のたをけてそ吹　独筆

産右絵人の絵をふ〜れれ
ものいへい唐宝ーー秋の風
いふつうてさうねんの考さる

猿簑　九郎

原汁桶の車やくくりしを
あうつかうてて青麻ちふ秋　芭蕉
新蕎麦あるのしたう角氣こ　野水
なうつ〜張ーー十のさうつ紀　去来
千代殺ーきあ紀さるしすりて　蕉

うくひすの青き葉ゆ出でて肱よのかう春れ給　来
屋敷うつる根よりそ抜くまる　水
夕飯よかまとと食へ風雲雪　兆
蛭の口愛をうれて家味れ　蕉
お思ひ入うをれて休む日よ　水
足せえ〜れ殿りの物こ　来
金鍋と人よ呼ぶ多れやをさ　蕉
ちの丸岩ゆきの青しの月　兆
町内の秋しふけ月やれ　来
伝をえるよも寒うく　水
花とうる月ハ西高う衣高て　蕉
本青の鳴蓋小ぎる言つく　兆
うてやらふ陸ちと沢十かく　水

紫さを赤の株とかくける　来
冬空の荒ふるたふ　兆
旅の誕生よ有明しおく　蕉
をさきき女の新をもそ　来
ふるおひ州根のちく　水
中人方お宮の黄根の雨鶯　蕉
人もこもれ〜ちうの水　兆
うそをに自殺をを抜人　水
すくも大事の新とり等　来
堀ようう四月青空ていを　兆
加茂の社ハよれやしろう　蕉
あうりの屋声ちうを茶ぬて　来
雨のやとりの名を逃遠　水
屋行る青空れのちうとさよ　蕉

志ゝろし水の簷のそゝぐらん　北
糸桐腹一くんよ咲にけり　素
去ハ三月曙のそら　水
夕顔歌

古寺梳月　芭蕉

月ゝとる庭さゝつく花ゆゑ
庭の梢の葉ゝの色とふれ　尚白
犬捕ぬる窗の月影とゝ（二の月ヵ）ゝ
別離歌の古記拔書　蕉
尾張のめてたうう侍ゝ朝ゝ
百家しめさる川の水上　白
寂寞と系る人ゝ茅屋堂ゝ
羽の蜜うゝ豆腐売とヒぬ　蕉
一ゝ心ゝろふれて物ゝ市のそ　化

送ゝる子の飯つゝむゝ　蕉
いそゝゝしとはゝしかひ乃油煙　白
秋ふと湖をてゝられ綿ゝ　蕉
月の系おさへて志ひろ小ゝ（二ヵ）　白
拾穂ゝるゝゝ拔けゝゝの出　蕉
信茂ゝ髪ハ黄ゝよ秋くれて　白
大立の換ゝいのゝ辻　蕉
三石（イニヵ）の猿楽ゝゝ系ゝ　白
八つ下ゝゝ志のふゝ俳　蕉
雁ゝ飛ゝ白根ゝゝ
ゝち系ゝ馬にをくむ猿蓑　白
商人の換にさゝたる帰拝　蕉
柏ゝゝ志ゝをゝいゝ」の系　白
蒜の香にさゝゝゝ　蕉

黒さよりよりる水を月の牧屋　白
鉦の声つくしたる玉園番　蕉
宮宮垂さとる　白
業荻に夕栗の葉の匂の風さて　蕉
ちいふん細に小の三日月　白
ちちちの様子のほれ一里　蕉
さても明ちる時をこう郭　白
西門の夕々の時の夕雪　蕉
小草ちちし姿い遠ちう　白
霧雪の中うて晴ちる日ぬをこ
氷仮えて拾る青の茶　蕉
宮門て蓬と入る影のそれ
打うけ垣ぬいろしの蝶　白

十六夜集

中をしと出てはさよふ月哭　芭蕉
糸紙ちちしてを生ちちに成秀
ひちちさて笑も拾いぬ萩の系に　路通
鍋こそけたちる青の世てしに　夫草
ちちしと睡ぬ小垂る苔の碎　惟然
様ちちとをタをこのけ　格脇
我ものよ刈る働のちに　正則
石の花表の去付城よ　楚江
鴉鶴の森をちけて続ひり　勝重
食はちちし日小時雨ちう　蕁香
拍ぬ木ものの冷小俗の苦に　鬼苓
流伏面ちのる谷の大竹　正秀
月新ちされしを白の上　則
ちちちしとちちしとこ明　重氏

撫子は花待つ秋は折うしろ　重五
賞のさく数を今数へけり　蕉
年ゝしの花かふらひし哉　草
花しる車もせっぬ数さの日　則
蓍の葉の下い芥子咲ぬし　睡
さゝやく事のもられてあし　正幸
ふけゝとにゝみ出くぬをきして　江
いてしのふこゝ流へてゝ水　苓
汗臭き人いかあゝ流さ迄ぬ　奇
さめてゝ流しも蟬養敢さ　然
丸止て流るゝやゝ叶てゝ　秀
只一ほとたのむ深もの　通
はしりしい古死都の荒のこり　柴菜
方ゝとあてふゝゝて接立　草

秋風は細の器やゝ〻ゝの竈　苓
栗ひる猪の夕ア淋しを　睡
斤論ふるみいい死され於鉢し　通
分細さをコの反ゝとゝよ　重成
長掠は銀土器成折くゝ死　柳浪
ほゝゝゝ死明て抜いの明ふゝ　成
職人の不あゝいせる花の陰　弦正
南おもてはめくむ若竹　秀

俳諧集　探志

所明の清て抜家や奢むし　正秀
方さしかゝる屋のこゝね土　昌房
橋の家四い菜と為ゝ等ん　盤子
は拭帝のしめ力ゝ死　芭蕉
屋舗の家辰と人は亜させて　芭蕉

すくとしたる奥の燈やう　及肩
窮屋ま顕　髮はうもの毫　整江
書紙をこの夜赤うの行　志
ゆたらい伊賀の上野にて　秀
拾奇の集　紙編かりうり　蕉
出来合のあふるまいん　子
小うるむ　菖蒲　房
名月ふ傍りてふひ　秀
新酒の酵のほとしてて　江
預る事　ふくれ　蕉
をのふるふとて　志
吸花のそれよ　肩
傘干せる　房
四る丁寺の二　秀

月ちるよりなる　子
見る弁り細ふ　江
湖水紙巻て　蕉
張家に　房
簾のたらしけ　秀
むさくさと　志
名沙紙をしむ　吟
みちけくや　子
くろよたしぬ　秀
松笠よ男之　房
たちてしに　蕉
一振の実　志
浮沼　秀
風筋よ　子

馬よ乗りてもの種城うとける　江
雁のこゑそきこゝ土付の花城　房
海うらゝえしものとうふるゝ雲　蕪

三井寺の門たゝくやゝ霜
茶ゝゝ玄紙こゝしの方好　き
彼岸て有さしみな清御堂

曲翠亭真

乳麺の下たきゝ教多ゝ

九月九日乙州ゝ一樽ゝ

さつまゝうれの
草の戸や日ゝれてゝれゝ酒

菓の香

うるゝ一紀稲の穂おゝ花乾ゝ乳　路通
雁もゝふ生ゝ海池の水　昌房
白雲の内ゝ船ゝそめて　色蕉
蝋燭の火城もゝゝ有　正秀
たのゝれて銀杏の実ゝ落す　野径
そゝうて乳城志ゝなゝ　乙州
関ゝゝゝふゝゝゝ　書好
匂い沓賣と鳴て　秋碩
あゝ肉ゝ紀ゝゝ　盤子
金堀ゝ入る河のとほ　里東
因の中ゝゝゝ　探志
芝居の札の栄集めゝ　游刀
御嶽ゝ雲霧も不自由に旅の道　秀
板屋ゝふゝむる菊の後ひ　通

内新よ二階の新畳つき上ケて　好
蕎麦の白ひのむせる下　猿東
かけろふや流れ出の雲うし　刀
朱風吹しほうる業　水の影　子
花よ雪の粥ふうふ杉ふら舟　秀
豆腐上ほにあけて客待　碩
うらみある義理就語りて須む　州
罪られと捨しもとの笹見　通
うたやうふ出てもぬるる蓮就　蕉
汐のさし来る方の上廊　秀
暮の露出る屋の坊主村の紀　子
くれおのゝの寺就明ふうし東　州
ちと矣もきいさんりふ路ふ　碩
ふ〳〵ふさ〳〵出て蓮の合目　蕉

下書

ほとゝぎす紀を寺寨に脂就狙ふて　好
扶のるよのひる筆の　篠　往
書ハ中川三史文迷くつ出　通
庭孫おゝやる宜就て孫　刀
おさへたる嵐就後よ立ち　房
蓮屋編こむ居風呂の編　子
内程ふうほとの主水を蓮箱　碩
懸の出入旅やう扶声　往
後猿集

蓮就中れきて　紺屋
渡ぬほとゝふ小物ふよ蓮根　
大とうつまるよ今けふくひた　如行
一年の仕事ハ麦におさ降りて　芭蕉
酒中人舟をさゝ血をあう　荆口

うちつれて弓射る者有りけり　文鳥
山ふし絵とかける小坊主　此筋
秋風や鴉うけ渡る長いうり　左柳
雲の上を雁てふむ　如風
協幅の浪ひ破りたる紫蘭　行
会佛の声れ細う雪もる　残香
別をんと冷き小袖あためて　千川
雅ここちの恵のたしふき　蕉
奥住居留守れ表い戸紙を打　口
茶毒さしてて鶏冥にけり　嶺
鞍おうを馬ハ丸雪をかぶ　筋
作る方の酒て出ふる　鳥
ふり志の糸ふる菴仙せて　蕉
目利こ素を送るくりり　柳

葛は系のおもてえせうけ　嶺
千川子
おくに伊吹ぬもとや冬ごり

俳諧集

白雲の三人の子に松を拉ぎ
名をあさへて

それ白ひ拉ふ白し水仙花　芭蕉
土やわらやのあるしぬうと雪　白雪
初うり蓮角ふるを考の来て　挑隣
ちやう地分の吹とるく　芦雁
洗濯のいとゆをうふ青竹　支考
地鼠ふるとをとりくれ　以文
簾ふいとらひ集めと絵を押て　扇車
伝風やう鳥声て千る　淡水

別路の出るにさそふ桃先
義いとちかう作ふ小出さ 桃後
水仮さまに用とそ乱うたをの 桃鯉
さすこのさとも宮うぬあま 雪丸
花をく紀あきに坊をのたび 雪
額やられたる白この方 蕉
拙の追ふまてゆるひれあり 水
茶をうう春てうくふも拙之 若
黄るをたらを紀化粧のをけ 之
二方の雛のようりつけもない 先
れもしうを紀霞の中をけやね 雁
小鯛と雛のとれるいせうを 隣
黒豚の濱もかくをれ明つれて 後
西のあらふを西のををし 丸

鯉
蕉
雪丸
雪
蕉
水
若
先
雁
隣
後
丸
雪
先
雁
隣
後
丸
蕉
之
先
雪
車
水

鯉はるの例よりはるく見れ蕉
松葉の埃よ者る 鍋 蓋
雑子笛城首よをたる鶴の仮
雪降ることてりハも明 洗 隣
小ちしと生死温泉の夢をて 考
院もまく繁城俺ひ強ひり 後
やうちうに鶴明ぬる長の方 丸
浪子の孫ハトよて拾さて 蕉
あの赤いてやう新酒を浜ぐ 之
馬紫ふる門の井 垣 雁
子抱の延ぬくる一丁れ 先
新のまこうて墓小 昇 雪
咲く花よ撫子さら成物語 車
村城さんて肥るる 松 水

風来寺よりの系図しを
教ゑ[illegible]いのり[illegible]る猿蓑ふ
魚四
霜うりて名残名のしする時雨哉
三秋成て草庵のかれい
門人もしかりてやうふと
とくさ
[illegible]
或僧弘覚より待を毛ふり
夷係家鴨も鴨よ似うりうり　利合
元禄五年
愛蓑菜

芭蕉翁より[illegible]八雲うつうつふ哉
吹あげらるるまの雪それ　嵐雪
帰る鴨うつし敗鴨も深立て、
七曜山城出こうふ法記　蕉
町低り栗の集たる麻畑、
嘉[illegible]も雇く猫る馬の血　雪
坊主も老しいと法遠て　蕉
七の餅法くも神幸おそ[illegible]、
生篠よ鰤法くもうう雨と粉　雪
日芋て[illegible]る松う切うけ　蕉
黒白ふ法ふ[illegible]ふき夜を[illegible]けて　雪
おううと法[illegible]法よく法眼　蕉
舌根の念佛よ渡る居士衣　雪
小塩い稲の中ふ法[illegible]立　蕉

拔てうゑ置沢の花上るし　雪
いさりふひんや焼捨の方　蕉
菊る花よ恒根弦雪つ氣霜　雪
かけうゑ重ね紐の下　蕉
分のうさも水ゑけて徒よ素　雪
和泉のかつら桶の石臼とる　蕉
紫幡のふる記都ハ荒さう、
よくも淡うう推て黒石　雪
年寄の志のひてとせう秋の風　蕉
髮きる斎ゑ方をひこうめく　雪
長門より西の劉の根岡して　蕉
衡よ玉ゑい仁と答ゑらん　雪
山茶花の後ハ水仙梅つる　蕉
雪よ鞠玉くゝ貫う馬　雪

有りせん大江の屠ハ八形　蕉
削て屠ゑ帖箱のふる　雪
所謀叛もゆ個ハ奴金ゆ法　蕉
孫宜ゑ秋よ秋も嘗ゆく　雪
花罪ゑ勉もゑの武思ゑら人　蕉
催こいしと田舞ゑるる　雪
赤人も今一日の酒樽嗅　珍碩
かゝけ嗅ゑて衆の振辺　蕉

百指

雪や餅ゑ糞ゑる塚の先　芭蕉
月も高恵ゑ豆のあたくゑ　支考
やふ入ハ行く義入とんせかけて、
なくさゑなゑゑ第一もつゑ　蕉

ひく鳥方板しと吐てみる、
風も吹うぬふ笹の葉はつゆ　考
哥の舎海こうろ時肌きを、
蕉ゑの宵ゑも居る　侍　蕉
ふくしと音とのおとすなを、
見この哥主い徒願成　就、
二三年たつのい爰ぬそこことく　考
髪紙をやしてて遠る旅、
夜数ふハり焼附るくれの月　蕉
機をる後い角力ゑの事、
何ふの田へり　やしてのぬ　考
表明ヶの星のまことをつある、
即供ゑ常陸の助も花ころ　蕉
白い徒ぬしに孔の紙入り、

下巻

かけうふの筆子例にもえに多　考
ゑ紙ををつて人の名ぬ向、
本稿こう出れハおのしかしこまり　蕉
金城鼎して後をはを　蕉、
松風のをんしと吸表まを　考
拾ゑうあるとと若る門　番　蕉
湯い水のやうにふうるゑ桶　考
馬を足ゑ留ヤ城あつこうる、
小調市の時うみたる奉公人　蕉
痛うふくれい女房ゑうもい、
むくに涼しいたの入うう　考
あの板こうら牧ぐらこの建、
二の丸の光りかやく金扉風　蕉
雨もいうてて本の朝ち、

さらしと茶漬の飯椀食仕直　巻

口上いろはて遊と　美　堂

氏神の花も咲つれて咲そろひ

弓居弦ことえて　伸る青竹

猫の恋やむとき国の傾力

紀よりしつう皮ふせんぬるふ條

餘念を生て出りん和こうへと

五月雨や蛙こつらへ来のこと

番の鶏冠ばらしやむ

立形よ屋根の雨やたらひ

素堂の世辛寄りとしれ秋七月

七日は晴す〳〵敷万葉七種

千株の萩の手折やはしの秋

星の数よ花火弱く後待　其角

もてたさや星の一枝もあさがほも　素堂

深川集

深川夜遊　芭蕉

青くてもある〳〵きもの秋涼

抱てゐもたき秋の村雨　洒堂

昏の月掛の木ッ端行うせて　嵐蘭

竹垣らしらの生れ立るて　岱水

松山の腰ハ焼しの咲ゆう　堂

焼炉の炭をくさす川　丈　蕉

いそひ日の浮うへてるる小豆粥　水

ふを内掴んて洗人油よ　蘭

掛乞に来のこころ我拒せ　蕉

変なる屋ようてるる下加茂の茶　堂

寒徹を山雀籠の中う　蘭
正氣霧のむ風のかるさよ　水
月のうちにすめ千ふハ仕てきて　堂
きもるとうにぬかさもる　蕉
鶏さう人霧の雪ぬ海月夜　水
粉智の町山の美遠き空　蘭
弓はしめをうるうるの息た　蕉
霧ゑりよ馬上の海へ乾山　堂
町中の名居ハ赤くきんて　蘭
吹も去うに壁の静かる　水
草足袋に地雪弦宇紀秋の名　堂
ふーえあうの古屋の月　蕉
玉水の早苗ときけいふつうや　水
我係うも和歌歩来る　蘭

山伏を切ってかけたる実ぬす　蕉
殺もたれいからぬ世の中　堂
附合ハ長歌上戸て春あらし　蘭
さうもしとあるを降ふり　水
のう物て和尚ハ乳よ歩ひる　堂
たてとめてある道の大日　蕉
撲あけて水田も言ふ人の声　水
遊行ゑよ絲桜　蘭
不ひ多沈鎧紺の花書市　蕉
武蔵ふ四ひ土角の竈　堂
茶又弁人うくまたら乳ゑ　蘭
雑ゑのほうにさ月ゑ州　水
三日月よ地ハ秋ゑそハれ乳

名月や門よりさしこむ月しら
十念なのゝ小粒になるぬ秋の風　許六

深川集　洒堂

苗代や水田のうへのいとさくら
雲うごかぬ日よ代かへる雁　嵐竹
長くも繋いぬる馬の音うして　芭蕉
糞竹けふる道のさうさめ　北鯤
古戦場月も三日のよをみ渡り　嵐蘭
去ちらこん迄ろ我宿の笠　堂
さし波の門の柱よ寄て竹
宮を出る迄い雲よ入る虹　蕉
巻薬よ居休ませるこゝろ　鯤
水仙ほころる房前の伽よ　蘭

十六夜集　芭蕉

秋草や日数経ぬ秋の露
青苔ゝゝきに三ぬるる谷川　岱水
野ふよう居村の智地実りて　史邦
うゝとむ方よ蓋瓶の蓋　半落
塩附て餐ふ人径の竹　嵐蘭
ふてゝこいるる草の引ゝる　蕉
年ぬ土打ゆるゆよゝ　岱
風訪の雲湯よ渡ゝる竹　史
矢筒の葉城たゝ歪石の上　半
やゝこゝ紅ゝよ咲る梅ゝこ　嵐
ぬゝ折のふゝんよ表の丸く麻て　蕉
抱出中よ行ゝゝを音　岱
月雲れて雨の降り止む星明り　史

早稲の俵よりはやくかり立　嵐
狗虫にやとく乾さるく秋の風　岱
番よ赤子我も乞る小坊主　史
花もの家とゝえる土手の下　半
細き井溝我の日る若葉　蕉
芸風よ大工の四る藤芝居　嵐
のゝにふらを伊丹もろ白　岱
流球よ壁帝の表うへ　蕉
芝能この係いあらん物　復史
瓦葺て近付ゆ本寺の土　半
塚へをゝうゝやゆる引　蕉
油ぬらに染ひゝの盆さて　嵐
月もひしきを碧油の構　岱
竹葉を百石ゝの門ゝ半　半

公事よ屋たる京良の坊方　蕉
傘をひろけもあへを俄あめ　史
足る用も異しゝ牛の月夜　嵐
出居へとゝも係居れ出る　半
干物つきやる精進の朝　岱
よ拭のゆれてまどをつゝ　蕉
駝茶とゝきこむ板あれ上　嵐
人ゝく毛利細川の花望り　史
聲も賢なゝ雑の勢ひ　半

韻塞

十月三日許六亭　芭蕉

ふたゝゝくも年孔功所雨

野ハ仕付たる麦のかゝる土　許六
畑実城賣んぶ拵の冷味して　洒堂
付の麦えたゆ秋の風そよれ　岱水
右の方菜へ入れと古たくみ　嵐蘭
先ユまそろ牧屋の物やう　執筆
おそろの侍宝中小たくそれ　水
焼集へたる小橋ゆ流　蕉
粽ゆむ盃の麦ふえ明ゆう　六
輾磯（テカイ）城の風る京良の入口　堂
宇多ハ鶴ハぬ人も弁ゆ白　蘭
紅蓮のけて蜻の食あを　水
青割ハあゝふる弁の高辻を　蕉
小ゆう萩の風そよれ立ッ　六
八方ハ旅れもゆる紅小服紬　堂

焼山ゆえの麦ゆ赤もけ　蘭
手紙を畑も花の木伝て　水
行〳〵も長宗丈弥の卵ゆ　蕉
去ふゝく原若の家ゆ白　六
當摩の城酒ゆ酔ゆ　堂
こつゆと鶏ハ車ゆ　蘭
板葺たくゆ麦く長持の上　水
竹の影ゆつゝ紅甲　侍　蕉
山時ゆ中ゆ紙生る　六
旧達ハ鉢の赤〳〵焼ゆ　堂
風月ゆかゆ家屋女房　蘭
いゆゆ赤ゆ赤ゆ赤ゆ　水
琵琶城ゆえて生る加　蕉
夏明ハ畏沙門堂の小方丈　六

舌のまいくぬ孤やゝ堂
一をちも青紅葉のふる雨　蘭
籬端に下る苔根路の坂　水
冬長のうとすかもふての涼　蕉
茶鹿たゝかむ百姓の家　六
ゑれのまゝ物てゐる紙柔　堂
七十の賀の若菜　茎　立　蘭

深川集

支梁亭　芭蕉

口切は壊の夏をふつゝ　孔
井のゐこん出を義の初霜　支梁
ふゝゝの空は絵入の弁当　嵐蘭
秋の壁ゐのさゐしの形　利合
旅人の影ゝは月のゐるゐ　洒堂

大戸弐揚ケ小出る線　伐水
〃
鶏の卵のうと伐産そろく　桐實
あゝたは掲を踏そむるゐ　也竹
みゐゐさ伐六田の柳は捶て　梁
魚菜まゐゐく寸大豆の汁　蕉
細うゐるゐ伐ゐ志ほ嬉の林　合
猩うゐくる宗伐の　拙堂
ゐゝゝと鶏義ゝなる石垣　水
酒てを食はなゐ安伐月　蘭
り雲の長門の図弐秋たちて　堂
鶏は掲ゐ人一猫の　清　粱
西日入るゐふの屋の間は家　竹
苣の二葉のもえてほのめく　實
ゐゐことゐ去年のゐ御お思われて　合

見よ陶とる〻新迦堂のくれ　堂
咲ゝめて去のふたうれ撫をて　蕉
多のふゝくとこの枇杷の葉を　蘭
丸卑して讃くもるよ旅の宿　實
清けよ住連をもゆる社丁　竹
白さりふ貓うる吉紙多そろ　堂
くとしれ房のふら人川に　梁
氷つきの稲の穂ふ肩重し　合
もえ黄えたる門前の坂　蘭
皮剥の物煮て冷ゝ青れ方　蕉
上を吹ゝく白ねろの鬱　實
谷つゝひ流しうけたる井戸　竹
古日於えうり二ゝろふき　堂
あゝも簾ゝりふねろしゝ　蘭

下ノ九九

盆よ簾ふる丸茶の数　梁
花さゝり御室の路の人通り　實
麦と菜経の野ハ綿し　合

深川集

二月御し宗鑑う客奠茶一斗未五升十ヶ八亭主の仕合ふゝし　価堂

洗足よ若と名のたく幸ゝ　
綿雑ふう物冬むき抗宜　許六
ゝゝ冬い隔よの強弦たゝ入来て　芭蕉
去いゝ後七草もたり　嵐蘭
月のを氷もものゝろふ翁責　六
築地も宋よ典茶の笑　堂
相国寺ほたんの死せ多て　蘭
梳の蓋とる藤よ筍　蕉
西衆の美堂たゝ茶陶ゝ　堂

むら〳〵咲しか舟島法とる　六
さぬしい宵れ鐘の霞成とそ　蕉
東　遠方の月を見さる　蘭
青潮の抜よ宿と霧れ者　六
ふるうの枝枝蔦先よつく　堂
糸うけの挑灯志めす朝おろし　蘭
汐さゝかい船罪汐れ橋　蕉
村い花田面の芽れ青と立　六
塚のうゝひのもゆる石原　堂
虚空僧の心よ迴りは紫　蕉
今い旅主〳〵今川の家　蘭
うゝうり後撰の風を涼遠　六
まゝゝ中ゝうゝ正岡ゝ記　堂
朝雲に湧うゝたる蜑れ恋　蘭

よこれし〳〵稲よかゝる麦れ彩　蕉
馬うゝ成侍意つ〳〵紀井戸の湯　堂
月抜よ義成洗ふ操出し　六
火焼して祢あてかゝれたち　蕉
ゝ川積こかくる年のお成　蘭
うゝとうゝと門の尾小雪降て　六
言観音ハし峰成る　堂
今ゝやるゝ(ゆ)織と言れ立　蘭
奉れの除ふ誰も張るゝ　蕉
義垣よ本ゝうゝ字ゆゝ堰の内　堂
月ハ赤う出る二月朔日　六
うゝ花よ伊勢の蛇の元初　蕉
殉撞(クスキ)花やゝく宮川の上　蘭

鄙懐紙

深川庵

月さゝ残いそ〳〵やうこ村時雨　千川

小松のかゝらそろゝ冬山　芭蕉

雄麻こゝ巖の透なれるの拾て　此筋

水やゝ白き海へ出る川　左柳

泊るへき旅の酒屋も一里程　洒堂

穂よおし巡むれとうひの雑　海動

初去てふくさむ日あく草刀雨　岱水

蕎り隙ころ〳〵南天の花　川

笠とれは前髪ちゝむ袖掛て　蕉

かゝとも急はいさむ大酒　嵐蘭

高舘は年穿鑿よあくてそゝ　柳

水風呂立る雪の降り出し　筋

如くさ菓子九〳〵る茂と雑　動

傷寒やゝけあらぬかゝる　水

伊豆の海市活よ私を漕入て　川

一ト夜の法よ宗ふ肯定る　蕉

鄙懐紙

木拾ひまうめる写ふを死入場れ　制口

毛と引く路とのとる組板　洒堂

急ぎの中拾ひ〳〵に稽見て　芭蕉

ところ〳〵しい木屋くく屋　此筋

梨の枝おり残る鳥れ月　左柳

桶よりこゝ芋壺のあく　大舟

秋風よ架こゝらもる意岩　千川

嵐のこたゝ梁の弓　蕉

六月の日も写ふ二ゝ作の木　堂

子数の入り蔦俳の縄もるまる　柳

袈裟掛けて供をする僧土宗　筋
箕面の滝のくもる山　峰川
義ふせの弱き松葉の陰　舟
俤は至の家流しとく　秋堂
月代もふらぬさ星の流れ星宗　川
夕紅ひらひらして馬の吹くる　筋
夏は今新たうとれぬ花菖　柳
夏の上はのはる陽　岑　羞

秋の夜やかけうるなら橋のうく
　拾成就して
ちらちらやいなびいてふむ橋の音
雲とは深くふむ行方うれ
月花の恵は針たうん宝入

小ちよは仏はたれ忘るるを　元峯
白玉文は芦辭なり　邑蕉
中級の酵も瓦は捧拵て　洒堂
月の徑は沓拾ふらし　峯
鳩吹て榎の実ふるくるしと　蕉
板の橋は小糸庭かさねる　堂
籠戸小袖にあり紅日の揚り　里東
君ハまれしふてしこの門　蕉
法出して土器ふるふ舟よう　峯
御会にて謙余とかい　東
門小明日の傍と配り玉　堂
遊蹈ふとくは法次　稲峯
山陰城まれは出る朱尿　蕉

梨地蒔けし兜のさけ　翁　堂

名月や雲井の橋成一ますけ　東

今年の茶試肖員嬢しに　蕉

花よ来て我名い備　徳堂

芸いかくぬこ藤の人右　東

陽炎の屋根撫へる株おて　峯

たくぬ衣や葛蒲れ至　堂

そんといふ眼い後のあれも　蕉

恋のあいれをみよや鳩胸　峯

塩ふへの岡い志ゆくく後田稜て　堂

英流い伊吹てさむ秋風　蕉

夕月や荷鞍成下を玲の音　峯

蟹ふし陸をろ質の出入　堂

麦飯や交らぬ飯とうかて　蕉

徳利引る川辺の舳　峯

帷るや風もそくし紅中小性　堂

明日の逸事を芙蓉の　其角

うつくしを却れ匂ひを紙せてる　峯

人目をたつと引ふくる陳教　堂

一点や地を接視の花さう　角

脂や日のさを芙蓉紅くめく　峯

雪いはころのろよいもい明　堂

茅且帳をそれ成のける　角

句兄茅

十二月廿日昨夜

邑蕉

折ふして花入されうを　椿

俗こむまれそりり李の宿　彫棠

月をたくぬ住まる看ふへて　晋子

羽織のよさふり　紀行　黄山
夕月のなふさけかるかんぬ屑　挑隣
出ふりをさて秋をせいた　銀杏
網ふ成る衣いいらゆる　樵の音　棠
肩てやしたりと　かち県の親　晋
冬もとる茶　稀ハ引てけしぬ花　杏
茶を煮て上を　洞徹の学寮　蕉
下張の反古をくれして　山
ぬめたい稽の多　ひそ赤る　隣
ひつうを徳よさ　上　蛾ぬ　棠
復法度と　無やせうふし　晋
（二夜）
貝の雨宮の方　て屋ちん　蕉
三すの残る　ひし　たむ　唐　隣
さ一つと　嬉をとやを　鈴の方　晋

蘭と茶とにたをさうる　夜　棠
雲ふる和尚　しぬ　ひ　ぬ　杏
高くる水　上る　箱戸　捅　山
山ちのわうふ　ハ　辞なり　蕉
眠りかくるの　合　歌の下闇　晋
うけむひ　稼　屋ろ　庫の　山
れもいぬ　ふる　屋の　待　杏
氣をとて　曹洞宗の　ぬる　隣
集す　ふ　ふ　ぬ　ぬ　棠
ぬふの　人　ぬ　ぬ　晋
をうす　ふ　ぬ　ぬ　蕉
ぬら　紀　ぬ　ぬ　棠
波りう　ん　ハ　声　紀　山
松茸　近　ぬ　ぬ　晋

そくさいふるよいでしにあり　春
老たるハ邢麓うの外に畏り　蕉
花の名よくしらこゝに揚貴妃　棠
附さし戎中にていろ〳〵拙なる　山
こゝ〳〵の氣の湾く三弦　籌

小傾城ゆりてふらんすの書　晋子
改中ゝゝうゝ小侍の蕓物　溪石
吹をうゝ待のひたのたらみて　芭蕉
かゆらゝゝろになすゝし　盃　普永
蓑盤残ひそうゝ彈く市中　盤子
いつも自由よ出湯のり　水　史邦
井蛙の系こゝにふゝふ方ゝ　去来
胸をうゝたる早稲の朝風　文艸

恰のいろかひあれとゝれ
天保六年
人もゝめ考中後のゝれ　松
去来のもく
蕭蘭のさゝすゝ　松花

春と秋身　南良
衣裳ゝて物ゝたむる句ゝ
悠々らゝゝ入りの　松　嵯山
掃きて消る雪をかゝふん　路通
石のゝ月に星ゝゝ　芭蕉
月移る蕊のゝ孤踏哉　山
のたうつ猿のゝ芋　畑良
後のゝう清ゝなら蛇秋の風　蕉

いつのね際千を宮の面うけ　通
あちこちふく嵐ぬぐたる間の脇　山
寺の物こゝる罪の除さよ　良
振鼎とゝケて拭あてられぬ犬奪　通
聲の利益を町よいろめん　山
子飾りの酒のかく味も附こゝろ　良
有も今宵とゝん人野馬市　蕉
物衣をこゝめくれぬしにあれて　通
我もこゝ乳公弦若い芝也や　蕉
花の兵宣の伺よ注せけり　通
古巣の鳩の子びもたぬ夢　良
講堂よ侍立ゝふ茶ゝくれ　山
流よたつる悪ゝの れ　良
形代よまる若ゝ浪連角　蕉

こゝろ星の宮ゝ　風　通
やねふきもいかれゝ多不破の笑　良
植おくれたる田ゝ中の小田山
ゝゝよ仮やせて宮ゝや鳴ん　通
我ものおもいいうゝ世一人　蕉
ゝ衣弦いゝんとゝれゝ吹ゝゝ　山
うたれてゝる中ゝ宮の聚薫　良
捨ゝ月弦ゝゝとゝ不ゝの星有　蕉
ゝゝのたゝうゝゝ谷の乗　通
火弦禁て岩の伺も冬義　良
風弦半ゝのゝゝを　頃　孔　蕉
ゝとゝゝる祖父の白髪と氣にけて　通
折ゝのゝゝゝゝ草のゝゝもの　山
入ゝて舎りゝ野の花の奥　蕉

仏こゝろ　山

俳諧集

五人扶持とりてきこゝろ柳哉　野坡

日ようしに雪鄙の　青　芭蕉

猿蓑の名残ちらるれ山こえて、

そこらなうけける維子の勢ひ　坡

ひたくかうあてもあけぬふの宮、

流利なれよて酢を買ふ　蕉

丸三年旅うら孫へ旅をして、

境の云事の今ふ奶せぬ　坡

三白よ松も抱も名の異、

うた世の恋ゝ忘れて後ゝ　蕉

殘朧よ栗を一臼搗付舞、

下ノ歌仙

殺入をよとなふられて注　坡

鶏改も頬うゝとる秋文て、

羽うちこゝを雁よ有　蕉

口しにことしれ酒城試ふ、

ちうの佛へ朔のとはしゝ　坡

咲く花よ十府の蔓菰あそぶく、

ゝ弔茶畑も摘しはこゝまる　蕉

さらしとよとまぬ水に去の風、

孫の宇よゆ人月ちらし　坡

け茶うゝせこよ仏を白眼、

やさ味噌の庚ふさそひて　蕉

一撥りくてあつゝ面　怡、

ゝ人も移雪のうこうと後　坡

お歯黒ともらひよ中戸さ歌、

むこうしの栄耀今い若よやむ　蕉
市原にそこそこのとふくけこま、
紙抱むよハ故の事うとい　坡
方新よ小春仲冬の侍ひつれ、
蕎麦うつをとほむる肌寒　蕉
ちらくと相の事ふるる水鉢、
書付てあるる金の稽古日　坡
粥とう紙おこされて髪けつり　蕉
猫丁変こうるくを急し紀　坡
ほの花の蕊らぬ立まか有京　蕉
帚目のうつまをしの旅　華
俳諧集　湖風
水音や小軸のいさむ二俣渋
折もをさる暮の刈　株　芭蕉

乙鳥とまるる乙切子の前生て　法蓬
刀の柄よくくる　狀　翁　利牛
食傷の腹ぬ紙ほしろ朝の方　風
豆腐てあるそ人盃の友達　蕉
小ゝ十人へ小家ハ木樵の名山し　桃隣
紙一文よ下弦城借る道　牛
昆蒟の色の是きも孫ちみ　蓬
糸のとを忘ハ殿の数　曽良
くるほとの子たふこと雅の跡　蕉
古き蓋ふこころ鍛城法る　風
小さうても砂場を歩く赤蜻　牛
蠟と焼てたれう食そめ　隣
方新の白。俳の蓋先と　蕉
盗人うへる蕎の朝　蓬

沓掛の駅ふのこふそ乳の雲　良
ゆくも雁　合よ蒸うつ　翁風

鄙懐帝

雨中

傘ふれしかふたる杵うれ　芭蕉
うつつ夢まむ塩の氣さし　濁子
れほろ月いまと巨燈をみて　涼葉
侵の去よ乳い入てやる　野坡
せんたくとしてう術のまうう　利牛
蓉らまてまと出を及もの　宗波
湯入り流の入り美ゆて浴井堂　曽良
裏紅の枝のれし合て　蕉
てひこりし廣葉の茶室を変換て　子
ゆくも墨よ家を出てけり　牛

伊勢のはれ又変稿紙してふ涙　野
れうこうこの道人の沙法　波
金拂ひ名月まてい延られを　葉
のほり日和の浦の初丁　良
秋もそや外てはうし庵居　蕉
淺洲たらはるの髪結てやる　波
左ふうう寸乃出れい花咲て　牛
瓢の燥をそらふ麻稀　子
去の元十方られのいしと　野
泊千ふ出もとしむ精進日　蕉
笠舟のひくい酒を奥もに　牛
先を掘由ゝ書ればうう丈　葉
むつこうしまよ肩字に出紙を味て　蕉
ゆくもちをする鯖の中化物　野

往云も毋こつて来て寇ゆう　牛
本縁ふきたれこうる母の里　蕉
冬場より紀方の畑屋一筋に　子
糸遊人夢の睡たそうゆう　良
会佛よ小さ紀鉦は経揚て　牛
紀又十日よ居あくた春　野
義信は麦も延たる麦杜　伝水
芋人たもの茂と〳〵は遠麦　葉
男子も花ひ付ゆ伝豆の付　野
麻入もそ中〳〵年の寿はと　牛
切り抹も芋本はそれのゆ紀　子
うけろ人歳ろ男の細洗　良

哀法ゆ

西荷の唐もあ人麦の唐
仟古鈔の
特の麦のんゆも似よ本ゆ孫
ゆと人の孫ゆもふら本ゆ縄
芋指や芋ゆと〳〵ゆ竹　移風
本ゆ法と中すし紀麦を新ゆ　具角

炭俵

芋豆のゆ紀咲麦芋麦の　緑　瀧屋
豆の水縁の芋る溝　川　芭蕉
上張りを通さめ不と紀西ゆと　伝水
ゆ川とのゆけべ流の芋中一　利牛
麻布よ張も麻て居ぬ麦野　蕉
と杜ゆと堀のこゆ人秋風　星

ことうし次義のかう吸出て　牛
競の仕業の工夫こそなり　水
明をとんふうもらと物　屋
偽物のもとへ生条城を　蕉
風俗う表明鳥の帰つくり　水
家の流を踊城えり　牛
鍋汁つあひ去こう能ありて　蕉
系の買ひ金城下て壹出す　屋
仕去ハこうやしく花の辞ふも　牛
拾しく抑を今ふとしくて　水
雲の添吹えこうしる能方　屋
ふとん丸けこもものおもい居　蕉
不在お傳と中のとろくし　水
こんち酒を城上ふあうこ城　牛

源平のひとつの出来し法芳生　蕉
金城たつめる　屋
名の俗よをこんて疲れ汗を　牛
宮を蒸うてきける婦　水
今の方に雲の原さ伴てる　屋
年貢漏んとと巻られたう　蕉
息災に祖父の白髪ものこな　水
悔恨ふちめ七夕の眺り　牛
名月の方に合せられ芋　蕉
ををしいをつ方ふ高　屋
世に名の通りもうらさし　牛
己の根像の祈ことうく　水
よこをにをより風の吹出　屋
さくしの上よをこ荘さへつる　牛

花見ると女さそうの法師哉　蕉
余の名のおしい小蓋なんぼく　水

深川庵にて
芋洗ふや風ふきとうち乱れ　史邦

芋洗の後ちて
あさうりや豆腐ふうすつの恒
和尚やこれもすきわう変ちん

翁草　文邦

ばとうぎやあいはきしをのを
おのれしと剃髪止む　治国
弁慶しさめよ方ハ出にけり　芭蕉
寿下にはてもとる板のを　書

栗丸を切る川上のやま　史
おろしと形のれしれる拾ふ　可
寺よ僧をい居る表仮　蕉
雨ふて白く咲たる蕨の葉　史
祖父ぬくうの葉にとり付　治
ふともこの貧乏神と名をつけ　義
絵馬城かくる年城れ哀　可
さらしと雪ふむ道のうれ明り　治
見世城叩てこだう出さる　史
鍵捧城戸塚の者の伴馬　同
服疫病のこやりきりかる　慧
ちんをうと黄代めくむ死の色　治
光こうれまぬ作変れあり明　可

春風に吹きほころびて袈裟衣　史
貧に流るゝ百両の家　沾
さゝらく疲るる旅も化粧して　可
蓋しわさうしの白粉の匂ひ　史
藤土厭離れさそふる待宵　蕉
秋尚ほとくもとの居座哉　可
うき事の佐渡一番に出立て　沾
名古屋城を切る美濃の才子　蕉
かちけるる紅葉ふ松の引しよ　可
秋とぬらをそれの月　沾
所志ゝねの上さえ風に寄こして　史
乗らしげるも送ひまる　可
をくりとて垂ふ流表の歩引　里圓
夏も小雨ふいるくひとをれ事　乙州

雨ふれいりとに土のふほひ　沾
絶てかゝる家ゆゝうゝ行　里
活ぬ間ゝもかゝる花さうう　洒
糸良ハやりうう八重掃れ　沾

小文庫

帷子の日しにとゝゝ賜ゝ　史部
和ゝ外戦稲のこゝ　貞　志義
蓼の穂ふ誓ひとか紀分て　貞水
扶市ふ人のたゝるゝ月　邦
木刀の言ゝへたる居合ぬき　蕉
二階はしゝれうゝゝ裏板　水
寒ゝゝふ茶の下と吹立て
石町おきハ会縁ちの蓬　蕉
多細工ふ雑着ゝ紀か八分屑　水

よひこうへせこも頁奴小松魚　邦
肌をゝ紀情の相乗のゝ合て　蕉
秋入ときの助氣いさこうる　水
雑炭よ情りにくきたる育れ方　邦
を住よおこうしを寄のいさうひ　蕉
拾かしの我利力も猪ゝうり　水
工夫家のゝさゝこゝるる赤　邦
花よ森ん一夏ゝ紀者ゝ　蕉
小性の口れをゝ三有　水
牛搗の肉しうをむ亂定　邦
馬の糞うく侵もいそうし　蕉
ゆゝ言に法羅貸城おけ也て　水
ひとゝ及もゝうし濡くれ吊　邦
搖うゝふ寄れの折中ゝ高流寸雑　蕉

下之平

氏あなくかさ此月いまられむ　水
衣拭ひのゝへて庶ゝる場ゝた　邦
百里ゝのすくゝ私ゝゝ　蕉
引割しゝ也伐找木の行れもひ　水
こうひゝいれぬ中ハ生こうべ　邦
云たはく縁よ金ふ紀方の蓋　蕉
ゝゝ姻然祇て略のけ〳〵い　水
ゝう祇よ雑てうをくゝ震ゝ　邦
陣ゝ重以ゝ者こうへのうひ　蕉
ゆゝゝるゝ言ふゝ雲れゆ紀流　水
二枚三日の後ゝ　邦
考へてゝ一ゝ第ゝれ紀さうう　水
百性ゝをむ苗代の陸　蕉

老の名残をしるべとして四十雁

画賛

鶴はもとの巣をかへるなるべし

鄙懐帋

仲秋雨懐故人　濁子

名月やちくふく雨のはれをまて

客よ枕のたゝぬ生の青　芭蕉

秋を殺て屋ふ定まる石の色　千川

すゝき生ふれの酒のくろゝ　涼葉

殆たゝぬ鼻紙おもひ懐よ　此筋

曲ま八板のすまゝ　濁子

捕人の矢先のけよとまを振て　蕉

墨を点ゝ雪のちゝめく　川

入口の寝所をたのひあり　筋

ちゝ郎魯よ秋板とゝく　子

鼻ゝちゝ挑くいかゝとゝ涼葉

恠ゝ気ゝふ洗ひ惟よ　川

伏見まてゝ小ふ笠の庵　蕉

飯の強さもムひあるく　秋　筋

力新よ爰かゝそ男八烏帽子髮　子

厩の毫のたひたゝ　露　川

花笑ハ木馬の車賤ゝて　蕉

ほゝゝもたゝぬ云の彼風　筋

鄙懐帋　芭蕉

いさよひ　ゝうゝ月闌ゝ行め郭

移私の垢をゝゝもそ浜鮎　濁子

近ゝ小雑浜畠ゝふゝ付て　位士

肩のそろひ　一茶の打次　仙人
又うせいの根ふ日照る村しぐれ　子
青菜煮う香の田舎の祭り　蕉
ちりけさのかさと女房の魚を記　水
叔をこうこう湯ふる山伏の髮　蕉
若皇子ふくめて草鞋奉り　子
渡しの舟てまの名を半俵
鵲の巣に赤さ沢の重りて　蕉
くけ曲輪掃のこを妹子
梅の枝下しひひたる蕾れ　水
暁ちち待る後のや垣入　馬莫
疣ふる後ふる沢佐城主了寄　子
うらら果てや琴箱のうら　蕉
都ふる十日も遅を花さう　普良

瓜をたてふる獨活の茹物　水
年礼を御作の下今を隙て　蕉
烏帽子ふ色ふ元も陽ふ　蕉
持つをめ瓜を力を右かしたり　子
よれい鼓たる馬のゆく髮　良
芝川やとや寄の俳を踏ちつ　涼葉
通徂のやしふ方城えふ沢　子
我兵ふ千束の茅城積ぎね　蕉
雁も丈幸ふふくけり文　蕉
眉低るををさ仏よふ水後　子
大原の伯屋星ふ久しく沢　蕉
数多く紫けハ年も富貴と　蕉
冬のくふとにさのしふ城約　子
初竹西六里のお代伝ひまて　蕉

老らわ〳〵ちのいこ　扶たもし　蕉
朝をきをあ鶏の記を麻を　子
旬あ〳〵ご　狂　の　道　蕉
雪からい雲車に乗っ一こ乗り　葉
ゐる風さ〳〵夜谷の　細　布　子

嵐蓼洲

秋風よおて悲しこと　素の秋
　嵐蓼に孤さ松思ふ
茅のるもこ世紙の秋とちらも　其角

　茶吸を源

角のうとい机の　偏　れ

鄙懐帋

十三夜ちのつ丈寝ものうれ　濁子
小袖の糊のくさ紀蔦　雪　曽良
焼紙は瓦の稲穂にあけて　芭蕉
荏胡麻のか〳〵に四十雀つく　史邦
雨まうら笠の干反りの志ろ合　杉風
浅うこ流を風呂に水をう　岱水
さう麦とを和うけにくら毛　涼葉
幸ををりい栗拾の実　蕉
松枝をこさ丈拾ゐる寺門　良
ひとう暗の冬のこしら　子
象の寸をもかくこめ毛そして　水
なくくくらへん拾落るく　蕉
ら任力松麻の衣の新ほう　邦
寄ナり言ふ萩刻秋　風

未、庚城行よりかけたる紙屋ゆき　子
屋うち地こゝろ〻ゝ厅器の食つゝ　葉
ゝゝの汁と華紙ゝ〻ゝむる初花　蕉
雪崎て旅ゝゝゝそゝ　邦
孫ゝゝも指を動うゝひゝ切　水
中蘇ちゝむゝゝ膝え　蕉
具ゝゝゝ雁ゝゝ拉坂堅て　葉
新ゝゝ似せぬ饅頭の　邦
さゝゝゝ居の杜丹ゝて　風
稀ゝつゝて出るゝゝ　水
笠潜ゝむ敬の五ゝゝ義も　邦
笠ゝむゝゝこゝに系ゝゝ　良
よゝゝゝゝ衣ゝ梅衣裝打言ゝ　蕉
伯母の伝ゝ　二

ゝゝの月実梅の梨の種ゝ　良
枝もゝ葉の指ゝちひさゝ　葉
義ゝゝ小土ゝゝゝ　子
ゝゝ細目ゝ　良
初産ゝゝもひの外に安ゝて　水
信ゝゝ屏風を返ゝ夕食　風
義ゝゝゝれ城ゝゝゝ空梅　葉
ゝゝ鎌倉の通の芝州　邦

素堂亭

宇佐の宴城非全庵の子
僧ゝゝゝ小秋菊城紙
ゝゝゝゝ屋ゝゝゝ藤の屋
葉の乳味ゝゝゝ浸ゝ数の中　桃蹄

抽のいろも紀あり たるさくに風雅 其角
さく畠ありもの 馬莧
八雲のるもあり 泊園
行矣のかさ[illegible]にたる人家の桜 雪叟

竹田先人を京琴なりて
うるーせぬ琴やはつ[illegible]蘭雪
融つうよふ城主の長文根 壽堂
[illegible] 野坡
[illegible]れたる青の土大根 無童

炭俵

廿日 淀川吉兵 [illegible]
振うれあれ[illegible]れ 備
うりてはやき[illegible]時雨 野坡

番頭の小節城境ねて 孤屋
行元よりあ[illegible]れ 利生
好物の解を[illegible]ぬ秋の風 坡
[illegible]の安[illegible]国の家雲 蕉
細の者迎つ[illegible]に吉[illegible] 牛
[illegible]二十八日 屋
ひとろ[illegible]は軍[illegible]大事 蕉
清氣の雪[illegible]雑俵もせぬ 坡
[illegible]ぬ[illegible]灯を[illegible] 屋
肩癖[illegible]る陽屋の青菜 牛
上[illegible]干菜刻[illegible] 坡
馬[illegible]日は内て[illegible]る 蕉
[illegible]の七[illegible] 牛
[illegible]る五十石 屋

此時の蒙鬼もうゑ枯れ　蕉
冬ゆる暖のうつろ　青牛　坡
新畠の糞も腐つく雲れ上　屋
吹とられたる葵ゆり　牛
門蔵しめ弟一の水とあふろ　坡
平地の寺のうをれ薮垣　蕉
干物と日向の方へいさしせて　牛
拾出を鴨の苞月くゝる　屋
蓑用ふうさ世をたつる糸任如　蕉
まゝこ汚法ふ一ふ狼　屋　坡
らくらくと大晦日も四つの鐘　屋
玄葉の好む狀の紙　牛
中ゝて傳宝合の信き矢　坡
聖をたゝきて庵せぬ夕月　蕉

風やうて秋のかもめ屋さうう　牛
經の巻の綜をひうゆる　屋
ちゝはらと系の揚物の関　蕉
閑黒糸りの連の糸ちゝく　坡
とともおも花の三月中時分　屋
藤炭のちゝと拂ふまゝうせ　牛
炭俵
雪のれをれ口又ふ忘れ宝し　坡風
月の出る蕊の赤さ　孤屋
下着と一番清ゝうちあけて　芭蕉
汚ときゝふて丈名の　代子珊
牙ふあたる風もふゝし庵方教　桃隣
栗をうゝれて庵さ　畑地　利牛
熊谷の堤されたるゆ仁の水　伐水

名こーら〳〵て雑ふ〳〵賣る　野坡
二三尺〳〵の藤布もらふ門の服　珊
馬のそゝ和のさゝる一丁　北　泊圃
外の皮雪路に賛る哀れ来て　石菊
稲はるのさとを両のはら〳〵し　杉
まゝ者の一人もなき浦の秋　坡
うつさる風のこやる盃を　利合
青〳〵しのなかなる人を呼覚る　依々
脊中へのはる思を呼覚る　桃
茶むしろ敷傳法く上り紀美で　珊
川〳〵次くに小舟いらする　菊
新米をうゝられて氣味よ紙を寄　杉
脊戸へまゝられて山へ切通　岱
秋おもひかく著〳〵と新かう　孤

とて集めて多れ格進日　曽
俳系と搗て俵〳〵うり巡　桃
わさ〳〵と世て茶代の礼　依
雪糸てふくいと紅腰と紅ち巡　泊
隣へ引て次我〳〵うて来る　珊
ま〳〵けさも伴の灰て塔を吸　牛
損をうつ〳〵て賢と新と　杉
大坂のくまをとれたる哀れ　令
何故とゝれい祖母のまゝよ　坡
を〳〵けぬる御前の能代〳〵　珊
次の小紅屋て住よむせる声　牛
約米にかゝをて居る数に食し　曽
七つの稚よ蛍を呼よ来る　杉
美れ西あ〳〵〳〵内たゝ生て　桃

男女ともに業をそろもる盛
鄙懐帝　路通
水仙ひとるるなまたはるるうう
雲の細目はうらく半夏　杏雪
我猫と蛙を猫通ひて焼て　芭蕉
行ことこれたる絹張の方　亀仙
朝顔はいしの絲瓜のりと合　千川
仁しいこれてつくる白粉　執筆
聟入は茶菓とのの名とうて　雪
魚よこの凡の殘る奥をぢ　雀
ぶらしに紅をかさ付て見ちん　仙
取ともおらしく育つ鉢ゆる　通
行宝ふ持つとつる布そう海　蕉
解そかへ垂くるる方のうへ　雪

ろらしと業をかしい鉢の毒　川
一鮮おくる雁の翁家　仙
おふしい姫ゆて来るおりに　通
乱くく後い主つぬ年号　蕉
猪猿や主下ふ見ぶ花の奥　川
雪の金衣と中ふくるまつせ　通
はるの上とうに世たくうて　蕉
彼岸ふいるとう殘すもあう　仙
り高小中ふ我るは仏るかし　雪
云ぬおもひの志ふく海息　川
元結のほうれておくる衣ろ記　通
人の情はつかへ指　蕉
俗の出つ嶽さく秋志しさを　仙
化俗ーさこうとかるの様変　通

有の有亭を屋持出よ　蕉
拓たる安の底にうりけり　香
庵人の名を問ふとこたへける　川
出ばくく俗こゑをつつる　僧蕉
何をいもいもしろうえぬかう　通
塘のとゆ城降うりむしを　川
のけぬのい紙はたく　角仙
のうをかしら伐ふつる青柳　通
花をう静うを寒を敷ふて　蕉
うくひと杖の中を沈のこを　谷
鄙懐帝　蕉
芹焼をとこ梅の田舎の初狩
拳でをし卯屋じ　張　濁子
織下に絡をむしろに寄うを　涼兼

わしをぐむくうれ城の木　蕉
うを有お干鰯俵のおくる　子
行くむ牛もえぬのさ青　兼
嘉嘉の小村ふ征伐ひく入　蕉
援のをくをの　連　蕉
求食を入堀婚の旅ふしく　兼
拖をひしもちふもしあ石　蕉
日はうはい孫を吸行移をを　子
和田義文とも招　蕉　兼
麹元の来ていを蕪伐荒　蕉
余よううう紀有の枝折戸　子
出くうとおして鼻武雇ふて　兼
松もをくをとる仏の稜　蕉
富ふふ命くうを花の後　子

破れ笠いとゞ哀れ
雪国はまだ去やらで馬に繋がれて　蕉
日記はかうし一帖の紙　桑
旅癖やふる紀五月の松ありし　子
名残り惜かりし安堵の風情　蕉
青信はえ去らぬ梅毋も哀也　桑
元禄十五年の頃の夏　厚子
焼たてし庭ふ軒ことゝの月　蕉
中ごろ雲桑さくこと机をゝ紀ゝ也　桑
寄り聳ハ仮り法をへに旅ふて　子
こゝに名ハ辰の布て色をゝる　蕉
こゝに名ハ辰の布て色をゝる　蕉
こゝに名ハ辰の布て色をゝる　蕉
桑茶壺東を庫の丁隈　子
なをこれすをゝ平と牧牛孤みて　蕉

湖水もしらむ秋の初雪　桑
うゝ雪のうへよ蓑のうらと　子
俤の蓑ハ仮りくゝ笑ゝる　蕉
打ゝ花よゝ人のすゝ蓑町　桑
笑ハうゝ出る矢沢の文　子

寒菊隨筆

寒ゝ菊ふ蕉のかゝる白の陽　蕉
とけてうのれそゝふ人　根　野坡
友ゝいとう玉掃をこけ初て
門ゝ魚出を有の蓑　啓　蕉
雪ゝも秋の日くゝのうゝ俗
此一谷ゝ栗の御年貢　坡
七十ふ栗ゝ紙ゝ助故　蕉
三人通りうゝ雪ゝ　坡

すしさい堅田の出張をくつへえて　蕉
蛙なる半の方、乗やをむる　坡
墨深き寺の雲のそこつへ　蕉
そ日よもしろ旅の雲の外　坡
芋掘る作者の衣食　蕉
徒よ法とつけて咲きそ苗　坡
田の中まはらせぬ丸木橋　蕉
芝よ通ひくく有徴ふる　坡
花の時紙天いそたくふれ　蕉
俵て来こすす春の義え　坡
煮豆よそ世話深を[義]
迄ゆるのよ居　蕉
裏舎を根殺のくる義の春　坡
よむ一の孫の痛む春　蕉

年ふりて身ハ是旅の道ゆき　坡
法て酒のむ系図の　蕉
ゆくしと板の風のあたるかと　坡
稿めと人の縄象て　蕉
方えきい新よ不見れ出来ん　坡
ゆきたく蕗いとくしけやら　蕉
俵よそるのゆくるのはるゆ結そ　坡
仕付けそそくそ鼠方の　蕉
田代植う向ひ迄江の末の出来　坡
天気よふつ春の神ら　坡
續猿蓑
猿ゆれよもれなる春の松義ル　伯圃
日ハそゆられと静なる　芭蕉
水かるく池の中より夏ゆて　支考

葉牛まして葉をいたく　雅然
雖ゝあうるとやうて氣の有　蕉
通りのふさふさたつる秋　考
盛仕舞　為て垂る鶏の魚　然
百藤の藤我ふかしうるろう　蕉
聳ゝ来てうれうるせられ物　考
中國うの世の古花右　然
朝日の日ハここへやう振雨れ　蕉
一重羽織う矣てたつぬる　考
手さんしれ育るの沈れ桜楓　然
山よ門あるた有ハの有　蕉
秋氣留の人のかけまいう　考
水除ひうる陰のふ翻　然
えて通る紅之井ハ花の咲かう　蕉

為拾ひとりふいとこ永き日　考
ふち風の又西ようふりかよ　然
わうるに豚を太幸からく　蕉
陰峠の内氏ハ今家変ら　考
宣氣の沈もむさとせられぬ　然
大せつか日う二日ある雲れ淫　蕉
雪ゝこゝけしー中れとろ　考
来る祝の系うけいこれ出乱　然
奥の世遠ハ遊年の俳　蕉
陰うこ秀のやを花用えそ　考
赤雑沈を屋の正面　然
実ゝうぬ姫のんうふげめ　蕉
森汗のとうるう朝うたの爰　考
多義式ちうとおれ松の風　然

大工はうひの奥ゐ寺四ゐ　蕉
茅舎もりくふかうとて帰るこ　芋
かゝ分て市の中を押分入　蕉
はあくう紙生い花のけもるくて　然
野のあつうのさぬけぬくゐ　考

俳諧集

いとゝ之寄引居ゐ引られるか　芭蕉
なうれの取りふ拾ゐ水叫　沽圓
書こうれ的居ゐとをさて　馬莧
之味をんさける搖の玉食　蕉
中ふ有拾之を咎ふ住之ゐ　圓
食こゝくゐる秋さむきゐ　莧
蕉しもに沿ゐ仿ゐて結髪　蕉
大黄の葉の義空かさゐる　圓

下ノ巻

力ゐく肱はそゝしう紀夏ひ　莧
絡ふ甲斐もるきふ狩　蕉
打佛堂六寄ゐ会て彩ゐ雑雑汁　莧
ありき紙蓼て彩ゐ雑雑汁　莧
はうの後十二月の相場ゐ　蕉
伏見の稜も京の名物て　圓
懐へたくゐて入ゐ夏羽織　莧
親仁くゐとゐふかゐ社西ひ寺蕉　蕉
力花のゐうう社西ひ寺蕉　圓
陽ゐたちて藤はうれゐう　莧
藤水のゐくしゐる芝北風　蕉
門のたうふゐゐるいも　猿　圓
門のたうふゐゐるいも　猿　圓
門の方ふ一村雨のゐう通り　莧
流ようう袋笹　伐出伐ゐる　蕉

鳥とぶかぜを雪の細江の山をとり巻く　菖蒲

ゆくはるを惜しむの牛　龍蕉

佛殿荒れ城郭は後を見る　圓

黒繪の小袖は襟のうらをせ　蒐

美濃の系硯と雲に出る　蕉

かさ袋の二階城居ながら鶴　圓

月を傳ふ癲癇ばさく　蕉

行くあの一番こんぢる花すゝき　圓

時雨酢こんくる抽斗の切形、

秋の空ゆくひとつ孤切者　蒐

奉加帳よ時雨くれ　圓

不玄儀よ花さく山のうつる伝　蕉

田舎の谷よかまるる気は　蒐

永仙の家れかはむはと

ゆくはるを三十四ヶ月ふをしられる

え孫七年

年業よ字をやいせの初俳

ちちしくのふ寡紙ん箱の海老　杉風

周下ゆゆ中のてやゆ年れ宜　孤屋

ゆ杉の親のゆてる時美部　野坡

養殺やおるの旬の捨もの　盛水

年たつや家中の礼は是月却　甚角

苔石梅咲たむ　圓　帝　介我

ゆも雪茶たのゆちゆく　岩義

山ゆうえゆゆ夕くれの町　松風

ひゆゆ只今を拾ひて咲ん　彫棠

故きう門に秋よめりける　横山

有明よかさ張籠のさけるもの　芭蕉

帆をハ合る秋の海　仙化

鄙懐帝　京集

鄙ハ言よ田孫の非武ふるつれ者

ちゝ雪の降こゝろぬこ　名　千川

門番の麻衣よりをむ友なえて　芭蕉

今朝むま初る為載の材　宗波

秋風よ逆とたゝく裏夜浦　此筋

むしも雨夜ハ風覚猪ふる　蘭子

肌寒く酒のうゝ武下ふぶ　川

ものふ長武付て柄めて　葉

癖寺り老尼ハひゝう髪和　子

京良ハ津の内ふゝてあル　蕉

掛ゝたを小袖のうひ武もみ為　飾

金の壱扇武周のかくさみ　川

ゝる長よ源氏一級の長ハ〜く　葉

拾てうゝと世武やと紀僧正　波

出来合も伊世の科武ハ麻相ゝ　蕉

裸足てあまゝ内屋の砂　飾

朝方よ花の為り物せつ武たて　川

日氣の長の京ハ武めたき　葉

石垣むま長の奥ハ為りを　飾

地取りの様よゝ人ものる石　蕉

ゝ近ハ庵うめ麻の為武ふい　葉

寺のひゝハ四五反の秋川

ゆ方よ地末つ出武塚の波　左柳

たらあ蕉を無られし　軒　蕉
先師ハ士儀和の一縄を　蕉
巻て居る内ゑ帷子の干ル　筋
うつふきて赤とす蔵は蓄かり　川
あいれ幸もふき講の家目　柳
三柔の指より西ハ〜られう　葉
茶屋の二階ハ俗の樓閣　蕉
英一紀点も大よう年ふけて　筋
恨の文を仕るる琴の音　川
られ咲ハ又赤てのほる塚上　蕉
言葉ゑとを尋たんほ　葉
備雲雀ゆ日ぬしけに鳴て　柳
唯うれほ赤ふるこ音に吹　華

歳暮集

梅ゆ春ハ小ゑ日の出ゆ山法師　芭蕉
ところしゑ雑ゑの鳴なり　野坡
家毒法ゑ赤ゑの日遠ゑ
かゑの俗ゑあうる米の迹　蕉
青の内ゑ〜しとせ方の雲
蕉ゑ一歩を秋の林〜ゑ　坡
卿既へ茶も〜ハるゑ〜ゑ
恨ゑかたう人ゑ逢せぬ　蕉
赤東通ひほ〜ほ〜ゑる細ゑ　坡
ゑ〜いゑの〜ゑ〜ぬ六方　蕉
既なる味噌ゑ〜ふきる雨濯　坡
ひとと赤出ゑ袋のゑと　蕉
赤もをゑ尼の打病とおゑ食　坡
ゑんゑゑゑ〜ゑ〜ゑ〜ゑる名方　蕉

初丁に糸うんの地おてえる　坡
蕉を相手とする居合一ト拔　蕉
町流のたらうと酔て花の陰　坡
門て押ふく壬生の糸仏　蕉
東風に糞のいきれと吹出し
かく居るやうに肱をつゝぬ　坡
江戸のた右向いの亭主登られて　蕉
こちらもいきとかゝ白城傍ス　坡
方しふ十枚の内れかゝの手　蕉
桐の木をくゝ有さをるつゝ　坡
門しめてたゞいて緑なる面白さ　蕉
ひろゝたをて表うへをとる　坡
沐手ゝ女房の釈ゝる者て　蕉
[illegible]ぬ浪人　坡

下ノ六十二

法印の場合成おくる花蕉
縄ゝ找下りて青き出来　坡
どのかゝも東のうゝに家とあけ
魚ゝ食あく浜の新　炊蕉
千ゝ弓一ゝおくしふさくらう　坡
未進のゝもてこぬ夢　用蕉
傳いも知らせと跡を連て　坡
屏風のうけゝゝんする菓ゝ盃　蕉

續猿蓑

八九月ゝて雨ふる柳ゝうれ　芭蕉
ゝちけうゝすの留　何ゝ　沾圃
沐ゝる馬ゝもこのゝれゝ滅ゝて　馬莫
円ハとゝにく晩の振　乗　里圃
きのゝちゝ和うゝゝ月のゝ　沾

拘脊うれて肌をさくかる　蕉
波拂もとゝのへ風の吹ぬう　里
孫う孫る祖父の借衣　蕉
服さゝはよりこゝはしうの孫力　蕉
篠ぬ志ま〻ついとや篠の涙　沾
約束の小雪一ぞけ賣へ来て　蕉
十里ぞうの余所へ出ぬう　里
桂の葉に小路埋てねりる　沾
あらゐうふゝ門の出付　蕉
いつくへう後いは法ふ孔雀望　里
やりと中を出ぬ京の反連　蕉
有明よりおくる花のたてつひて　蕉
夏来よそろへ秋のとへに　沾
春ぬ花中に落れ俤夫　蕉

伊勢の下向よ〻向なりと連　里
長持に小奉の仲ろそ〻しと　沾
くつ〻ぞとそのくれる春ち　蕉
禪寺小一日あそふ砂付上　里
擬の角のとて ぬ貫 穴　蕉
演出しのはに俵ぞこふ心　蕉
ふ生ぬ晩よいかくに内法　沾
方法よ俳茅流のおそろひ　蕉
蘿の葉の名ふ柔さよし　里
むをて来て栗ぞえ味もむ唐　沾
俳俗はしふ　ぞ　の　き　蕉
削やう〻長刀切の冬の風　里
ゆふさに星のこはれうれる　蕉
引ぞて毛程よ舞ぞるぞ　蕉

そつと火入ふおとして　薫　泊
花はくや殘らぬまでの名残　蕉　蕉
涼しさのほるかけろふの水　里

それぞれの柳のこゝろ志乱れ
吉野の花ゆゑ志なくる夕ぞ
くるさつや野の果つゝ芭蕉の葉
乱れ似ぬ芭蕉ゆゑ生よ初桜

上野にて
四つ五ゝの桜はぬ花ぞ
ふらくれて茶摘もまくや時を
うれ花やゝ〳〵を柳の反こし

蕉雨亭

紫陽花や藪を小屋の垣ぬき　芭蕉

ようれるあひる作る茶儀　子珊　杉風
朝日の朝のゝ愛ぬ声やて　杉風
出雲の相よそゝ乱し　桃隣
かんしと有明の月乱れ　八柔
指掘うけてゝ〳〵もゝ来る　蕉
作らくて作ることぬ破れ　珊
ゝゝしと侯風の音　風
美業ゝ羽織ぬ世て仮り抜　隣
かさゝ乱のゆたゝふ袖　柔
商ひしゆゝうと内の納りて　蕉
心のうゝさる下市の上　珊
草庵のたいていは孫の気むつ　風
七日の有も未と細ゝ乱　隣

秋来ても畑の土はひいられて　桑
そ雀の羽の生へそろへ声　蕉
ゐる〳〵と豆のやうなる花盛　珊
ひらたい心のあたちゆう　風
正月のそなへうり飛脚の人雇　弊
浩たら俵とこうたか取　桑
豆の酒麻てうり酢のはなそ　蕉
五ッうふれい帰る女房　珊
此係も利上げはりたる迎し　風
まんまと今朝八鞆と奈良　弊
結構なさうれを汁ふ切入て　桑
乙世ようり奥ゑ家ハ引とと　蕉
うるはけて今年はとる盆れ方　珊
まゝ義ふれ蕎麦の迷府　風

栗
陶
陶からまとかんなものい入　桑
いそう志〳〵一日はいて供仕度　蕉
蔓くゑ白ひ講さうゆり　珊
今のるふゑるゑうゑ行ゑる時両　風
日雇の五番銭義ふ元迎　桑
屋徒流所茶屋の跡のかそ　隣
小奉銭まうた他の山元　華
郷懐帯
懐に異日を所代未勢を終えて
鹿徒すゑ田氏ゑすます
藤の房徒ゑ日ゑ義りこうふ　蕉蔦
牡丹のそれを作む度湯　千川
みゝうれも力ふゑるめ乳して　涼蕉
袈ふ立て亜路を形ハ此　左柳

雪ふり八葉ふむ馬の冬ゐる　川
出ていとまの金山の　砂　蕉
吹わくこと抜も紀ことの社　柵
いつも窠春ゐる鶯の家　葉
大のまれ歩まれぬほど紙肥て　青山
稲さら日戎借りふこそやれ　川
為ふ曹洞寺れ夕ほとめ　蕉
瀬のひくさうのぼる方代　山
生おうら鮒ハ鈴ハ作られて　葉
貴ゐ出来せいかつ寒しく　柳
順礼の宿りて椿の西うこう　川
見しりたこ作しく服さし　蕉
花見人とふさる名月の陰ゆう　山
花へい桜とさるる家　餐　葉

下ノ六十六

蕉ふる蹄鉄の青茂高淀の　蕉
もまおらつたる行器の蛤　此筋
陽上りの浦衣干るるとは蓬　葉
宮の破まこ入るく小風　柳
さへさふきゐみ殿せハ鳥も来す　鮫
雪のまうれいに行ものやま　遊楽
萩畠年貢の柴に苅さへて　川
酒屋の門をたくく月の秋　葉
人足の貫関引あのこさつくみ　大海
関をこれまこれ生をこんせうり　蕉
義と思ふこ　おしひし　死而　糸
降り出をるもよさこく時の雲　筋
隠れのこうこ行交亜と絡ひて　柳
大ふかいせさこ一つの金物　舟

僧肉ゑう治川ちう流浪声　葉
世しとされて休む　涼　取川
武蔵いつよう寺の花のうけ　蕉
性のおのつゝめる　苗代　糸
獣懐帝

俳別

風流のさと成時やすゝこ　涼兼
絃のもちうち小舟の花の雪　芭蕉
舟川よひ流丸釜の傾きて　青山
門遠へとる聲者れ蒸掬さ　曾良
月の抜いつん知らぬたも静さ　濁子
白紙西瓜もう今ハ涼しよ　嵐蘭
庫裡焼のまゝ未だる盆中　岱水
ぬるゝ一つまのそゝ六尺　曲翠

三ツ屋よりうもこゝ心寄りて　嵐雪
仏もあるを能をを気を出　葉
り焼を屋ゝてく新城かゝ合　蕉
本貸ゝきりい不純にる　如誰
入新し畑を紀言聖の朝寸月　良
徒と為ゝて中ゝ紀人　山
輝よ隣小印城撫出一ぬ　翠
小鯛の文殊送る村し　子
この花よ利宮殿やこめけん　蘭
寺のくれ未城おこれ雪水　岱
入物も田舞ふゝ似せて井紀　葉
陸るを寸けゝを食城　雪
長うぬ髪人冬の責り正　山
ゝと年られて居白紀　蕉

大捕をう[illegible]
蕎麦の粉ふる[illegible]
[illegible]
おとけさ面[illegible]
[illegible]
[illegible]
排[illegible]世の[illegible]
稲荷つ[illegible]
狗の尾房さけ[illegible]
雁氷の[illegible]
門後をうれ中りと[illegible]
機嫌悪しに酒[illegible]
やよや待て[illegible]
巣をう[illegible]

子
蘭
雪
業
良
岱
蕉
山
雪
蘭
業
岱
子
良

小文庫

俳別

我[illegible]いわさとそ[illegible]め首途却　山店
[illegible]お牧原の[illegible]　蕉
馬[illegible]の[illegible]て淋[illegible]き牧の野ふ、
四五千石の初のたてやま　店
[illegible]引とる[illegible]、
をとりの他法[illegible]　蕉
[illegible]
ほ[illegible]るものよ[illegible]やらる　店
蓑生に[illegible]やりたる男風俗　蕉
湿のふき出の[illegible]南[illegible]　店
丹波う[illegible]仮[illegible]ふくて[illegible]鳥　蕉
[illegible]と利上さ[illegible]　店

雪こゝ忘て土器うゝを遣ちし　蕉
たゝ糸中ふなそさえくる　庇
秋吟のひつゝとして坊法師　蕉
嵯峨にこの年んて乱う枝うふる　庇
奥の院とのゝ（花とさ）散　蕉
今朝うゝいゝ雪の吟く　庇
蕉の日に産屋の伽のつくりと、
かくらしや湯淫喰らん　蕉
いそうゝいゝれ股を戒を垂　庇
因にらもとうに憂ふる　蕉
糸ゝひくる櫛こやゝ皆らられて　庇
佛の木地を法むむ糸たて　蕉
ところゝと白挽出せ沼ゝん　庇
そゝろに美のもゆる井　掘　蕉

羽二重の赤ゝるゝそれ赤ゝ　庇
若い時ゝ弟せゝすゝ　蕉
雑炊ゝと盗まれゝ今朝哀　庇
畠いあれて山久雪のゝれ　蕉
日光へたんうゝを秋のゝ　庇
ゝれゝたのゝ山水の　蕉
中ゝ風ゝ蒲生の乱も放れり、
物ゝせゝやとゝゝる工人用　庇
花のゝる中ゝ松山をゝうゝて、
森芳野ふ黒谷のゝち　蕉

ひゝゝひゝゝ
ゝゝいゝゝ　深川の庵にて

雪中年二敷ゝ老と　峰

麦仕てそうそう上る

五月雨の降の陰家をとゞ留え　利牛

鈴屋

刈こゝろ麦の白も宿の内　野坡

麦畑や出ぬけてふは麦の中　岱水

浦うとやむこうの堀のうゝ乳色

武蔵を出て故郷遠く

川崎やそらにおくられて

麦の穂をたらうにつゝむる郵

張行灯や紀橋も茶のふはひ

篠田塚本氏にて

五月雨の夜吹て高せ大井川

夏は月庭油うり出て未坂也

夏日記

藤川ゆうるかく山路さ　芭蕉

水鶏鳴と人のいへばや佐屋海

苗の草をあへなくけ　巴露川

朝日よむうゝ合羽を吹れて　素覧

遅よの月へうしろ生もの　蚕

さつやよよ暗蕭せうゝ月の秋　川

くこゝゝて後ろ孫子の夢　覧

耕作の素城うしろ初の比　蕉

豆腐あちふこと信濃街道　川

風爽の涼しうぐさ一紀城　覧

雨の降る日城出ふ寄り　蕉

地獄の縞ふうむ蠅の足　川

蘭代荷あけて門よひろう　覧

[illegible] 蓋
[illegible] 川
[illegible] 覽
[illegible] 蕪
[illegible] 川
[illegible] 畑 覽
[illegible] 支考
[illegible] 左次
[illegible] 巳丈
[illegible] 川
[illegible] 覽
[illegible] 考
[illegible] 次
[illegible] 尋丈

[illegible]

[illegible] 川
[illegible] 覽
[illegible] 考
[illegible] 次
[illegible] 青 川
[illegible] 覽
[illegible] 考
[illegible] 次
[illegible] 尋 丈

[illegible]

砂川集

蔦柿 俗に異

年流を村のさとを中五月雨　謙

青苔ふかき切株の花　去来

一枝のむしろに置おし合て　芭蕉

柄もこしもたき脇惟然

月新し芭の海亂の下ろし　丈州

堤下りてい因の中の道　支考

涼しいふよ井戸の間を　来

住舟い月よ十五夜あら　竹

秋もやゝ今朝うゝ紙絵け　然

雁ゝ鶏のとやゝ来て　野明

抱巡て松出いろ有明　考

ゝよ人をよ奥さ紙ゝ　蕉

雨乞の志ゝ形ゝ情巡て　州

行芋とゝゝ掃箱のゝ　然

極楽てゝ紙居不紙ゝ　竹

客さとゝゝ世徑ゝ　来

道もゝ畑の祖の花さゝ　州

芋蔓紙絵さのむしろ明　考

（イニ門舟の沼）

撫紅の出水ゝ下ゝ雷　明

塔よのほゝて消ゝ白　然

賣よ芋ゝ筍堀てゝむゝ　考

茶時の雨のめいゝ苔　竹

この頃の上下の流の戻ゝ　来

脇よ扶さを下ゝ月の音　蕉

茶ふさ小夕爪の形ゝ　然

ちゝゝ名のゝゝ初ゝ　明

朝の方紅くなりたるを五六ばく　行
ゆるるふしなるを忘れしめしが　来
蓮生のふもとにうけつく伏こ拾　蕉
かけんをせるる泉侍の桶　然
生来て来る青の下深気にて　明
伝ひけりし兎小髪結　竹
吸あて定歳の岩城を世ろう　来
肥後の相場城文をとこん　蕉
歳口も花の連ささそれて　然
白くせるふうしし春の面風　昨
市の菴
柳骨折斤ばかりし紅赤瓦　芭蕉
方引捨る道中の得　洒堂
即く雀里ふる生ゆ乾て　去来

塩ふけ波をる春石ゐの枕　支考
方ゆるいるふふくゑ紅の鶏　文仲
小鯛ゆれてゆゑ思り付　素牛
上炊ゑてそらく伏後小蓋系　堂
る桶を入るく先通りの伝　蕉
瘧なも食いいつものくれて　来
大ユの軽子よ弧伝傍る　考
仆戸樋の水汲うる庫裡の先　牛
たようを待て酢酒利蓼　堂
ふう半もゆをるく雨のちと　草
恵くよるちうせんてくる　来
歩艶を焼しゆ絵と両方よ　堂
ゑるてうと撰の木の森　牛
方花よふを門とむつ入り　蕉

巣おろを思への登う猫 牧堂
陽炎に眠をつとなる医者の供 華
我業の香のほつとしてまる 蕉
行にの溜りとうゐと指出して 堂
迎とたのむ明日のゐれ 揚 来
うを雪の一たん蹴ふ淡 考
御前いちんと次の田 楽 蕉
遅ゝの細と嵐のなる夜 堂
隣の明屋あしゆなり 牛
菓子の跡て経讀む通公姫 来
を拾ておろに牛の 考
川に流りて立ておりはる 蕉
岩よのせたる田上の 舟 化
正月もいま平れい淋しき北日 堂

下八十四

種漬よ来ゝとの名 代 来
咲られよ行つゝ秋をしな 牛
彼岸ぬけおけてお使 草
ゐ粉をぬ生ゝ下沈 良 考
役者をやうの衣の 薫 来
彌波山集

浪化

嘗ふ新日さたゝ井桔子
礼者うしたちくまの 静 去来
やふ人の土産代合ふてしらて
又明のゐよわるゐる空 化
巨燵切ゝ立ゝ遣ゝ 為
ひろひ残丸ゝ借る 来
猫人の銭を買ゝ田舎道
かひこの臭ゝ六方の 未 化

京たち綱城一こい引ちし、
小屋ゑふらふ塚の裏町　来
玄冬のちら〳〵と乱る尻道哉、
梅咲そうて玄花こゝやゝを　化
年中城松の内うり新煙くひ、
伊勢の帰日いそう〳〵紀玄　来
上紺の未綿合羽に傘はて、
湯屋の手遠い八ツ下りふり　化
名月のもやう五ふかゝーあひ、
一ふくもふこと梨子より切物　芭蕉
玉味噌の伝濃よりる秋の風、
不見ふ寺さ性よ打とる　央
花のよりふるひ江戸に陸うゝ、
恵うけて手る相役の矢　化

此者城ひめひて通る鉦の鼾、
青田うゝてうゝのうせ　蕉
平ゆふるふ城ゆくる水場、
給仕をさせて馬まう食ふ　来
方〳〵紀表の塩柄を星てる、
聖灵棚ハよりと　究　屈　化
正の小万城通よ出ると興せて、
まてくかうう去年の傳業　来
条宮こいへい盗もゆう〳〵　化
ふけりと新日にむう人接を　蕉
養をたる拡ふ紀の笑ほれ　来
四五人通を紀傳を宗ふう　化
薪を町のるゝもの磬古能　蕉
いつも去ふもと紀世の中　来

朝霧ふかくこめてすゝし瓜の泥
古方や蓮の葉におく露しゝ
清流や浪ふかうして月涼し

鳥之道

去節菴にて　芭蕉

秋ちかうなりぬる中四月末
さゝろふふせる捨ふれたる水節
有秋の教ふりの火新すきて惟然
新らしく澤に下るる鶴　支考
降てまゝ丸雪ゝそれの主殿節
多ひらふいて掛細ゝをる蕉
多鉢と喰いて隣の腊とのゝ考

行の親ともたれぬ大死さ然
有して秋のかゝる喧花さゝ蕉
うゝし蚕のせくるひゝゝ藤節
佛坦の陰ゝ方のさゝめゝ然
梁ゝゝゝの落る秋風考
八朔の礼いそこ仕舞節
毋義の鯖の時ふゝゝるゝ蕉
西英法ハ地早ふゝれ出る不考
扶ゝりまゝる遠有れ然
結うけて細縄足ハ如死の恒節
足袋ぬいて干ば豆腐湯考
年礼ゝ丸さ紀やつる供さて蕉
伝すたゝりと立ふゝゝ雪ゝハ節
切焼の上ゝう三ゝ紀額つき然

魚に琵琶とられたと聞く　蕉
宋鄰は四国に雨がふるやうに　考
芹の根掘りおのさらりし　然
きよろりと京への枇杷を荷ひ連　節
嫁と娘にきる口ぞなく　考
客いられさむくて榮る巨燵の猪　蕉
道までもふくるおさの限なり　節
髪結て番に出る月の朝有明　然
木に十ヲとつり藤残たしなむ　蕉
蒲俳を中稲仕わけて食ぶり　考
桶もたらひもわたくし紀から　然
投うちとられまて猫の追ありし　帯
首に掛をとぬる掃除白　考
花咲て藥つみはしめる裏の山　然

ゆるしの肥る赤土の岸　然
續猿蓑
夏の夜や崩て明し冷し物　芭蕉
露ははらりと蓮の縁先　曲翠
鶯はいつその程に音を入て　臥高
古き革籠に反古おしこむ　惟然
有明の雪もちらよる雲晴て　支考
赤らみて静かなる器の紀　蕉
精をとる揚の外へ追ふらし　翠
山ぐちの名を云て出る　高
飯撻かる面桶にいさむ穿鞭　然
鳶て工夫をしてる眺め降り　考
あの家にて漬る橘の番　蕉
持佛の顔に夕日さし込　翠

平畦ゑ菜植所えしたゝこ跡　考
秋風こたる門の居風吾　然
馬柴て張ハひそむる方の新　高
尾張て付しゝもとの名におふる　蕉
解ぬのこゝしけ花のあらふれて　翠
正方このゝ徳もよゝさを　高
玄風ふ普清のにもりいさすゝ　然
技ゝ村へぬけるゝ道　考
養ゝぬ奪も閑もに利て　蕉
行その時ハ山伏よふる　翠
笹芭を持ゑ附たるゝさを箱　高
巌こゝゝるゝ方此ゝと糸　蕉
お者と行えに立ッ矢木の町　考
除の日ハ雪の氣生ひ　然

呑ゝろゝとせぬ酒の引　翠
差うへのゝ成祝へあつくる　高
対付しゝゝ箱来たる方の書　蕉
そろし歩りくゝ皿の上簡　考
去発注る四条の角の行京町　然
高漆をあくる表　芝　国　翠
今のゝふ徒をつゝうゝ徒の上　喜
大き祝徒のゝんふ笠　ゆゝ　然
さゝうふる花ゝも扉ゝ　考
腰ゝけつゝし後撰の下　高

芝芝ゝ屋ゝ祝と抽ゝ
涼しゝゝやすゝ社祝の技の　秋
ひやしゝゝ祝ゝ

七夕や秋を定るはしめの夜

亀令

家ハうれ杖は白髪のゝ糸り

いなつまや闇の方ゆく五位の声

壬生山家

つゝしさ笋杖もつく抜の妻折　望翠
井のもつれと初あらし吹　惟然
朝月よ鶏さささへ尾をふりて　土芳
さられハとらぬ狂言府ふれ切た　雪芝
大八の通りかねたる世の小路　猿雖
防さの龍よ編笠も荒れ　芭蕉
痩るから水仙ひらく川おもて　卓袋
雅中へ斗を探りどさ出へ　九節

嫁入の来て娘られ門まつり　芳
枝と草履を釣りて追　翠
一くらみ空をまだかたより就　然
臆病る多り接念の浦　雖
大島のとられて因も細かき　蕉
蕎麦粉とふるふ推なれ汗　袋
出かけみ出て扨いつ世なれ携　雖
織持ちて祖母の涙ろし　蕉
まん丸よ花の木積の一かゝへ　芳
どこやら寒き乾小風　雖
桃花屁に花さ咲八出来　芝
ふらひのから紙み残墨る侶　袋
冬されの九年母赦しむ鳥震ひ　蕉
たまししされハ居風呂の漏　芝

持徒の一句而にうりうる　翠
あたらう法ゐつかられつうた爲　芳
言のに入ゝうれたる道具市　節
葉のはゝこうのぬう紀小素灌　然
ちうあ小れ又ゝうる法弟　雖
ともに年ようるあ小さうの扶　蕉
有明よ志はしゝてゝ馬と雪　袋
雪時雨ようう頭痛やゝたり　節
引たゝ留ちふゝて五ゝ莊門　芳
入とりたよゝうにてゝ畑古井　芝
ゝうゝしとゝさせられ付る見物ら　雖
いゝ問ゝゝさられ法ゝゝ朝風　然
さゝしとゝたの法る大ゝ芝　翠
折にゝる土ゝの弟　松　袋

猿雖亭

ゝうれしゝと赤ハ海に咲ゝうれ　猿雖
雁のかゝらをあゝる雲の　穂　芭蕉
朝方赤篤ふやゝうやゝく遅付て　凧力
茶のゝゝたゝい暖屋のひよ　望翠
かつたゝと拾ゝおゝれ雑水取　土芳
氣屋ゝゝれ稀　弟ゝ　卓袋
暑屋のふゝたれよゝやゝて　蕉
名主と地下ゝと立ゝゝる利　雖
燒飯を刻ても中の冷たゝ　翠
れもひ弟ゝれ出ゝゝかう　芳
ゝれハ扇の要仕ふらへし　袋
湖水の面　有ゝえゝゝれ　若
暇ゝゝの小角の表を拭ゝう力

角力よこ寳こいさともゆし　雖
山陰ハ山伏村の一うまえ　蕉
くつ凡うこうこ形の餅の巣　袋
焚さして宗こうこうふり屋の花　芽
土うれこうれまえの凡ことち　蕉
坪こうの川除の石垣こ上ケて　翠
日ふくさしに風くりあ〳〵　羲
大名の供の長さの果もこれ　力
むうれの嘆のおうる血れ通　雖
一井ハ代をもてまぬ酒の粕　蕉
たうれの高ふ霧うこうる　翠
燈ヨ茎左細立の板ハ矢て　芽
鼬の毒の抱もとのそ　力
くくこうくいようのぬふ主て義ど　蕉

于かくひらのー　雖
神主・市・供を持て上ちる　翠
志ちちく家よ休ひ氏土　帝
衣裏て掾をるこ行新く　蕉
加ぢ〳〵しいる宮の子れ凡　芳
耳多蛙ぢこうる戸ちに接ふ　雖
引義のこちこ雇ひ六天　翠
大うりふ凡中実あくる花の張　力
茶の洞多のたこたるひ二方　羲

殘る板よ拾ふて行う楚亦　垂芝
鮮番ふうこにつんこる波　龍　芭蕉
ゆハ方よひう掾ハ実よ物て　土芽
うを持えよ実る鶏既　風彦

名とそいめ二人つゝを立在ゝ　玄虎
こふちうけ玉　玄りの明かの　李蘋
燥萱弘目利の内より行たて　蕉
ぼうて　そるとこと門の鶏口　芝
大木の梢ハ枝のちくむふり　麦
望この麦とーてとうん後ハ　芳
山伏よ終ふつこまれ配る　蘇
一里山ても宿をとる　旅　虎
かけぬの布袋の呉方うて　芝
石の条よとうしを　蕉
秋うせの雨ふうしと川の上　芳
ぶり荷ハ私とやうよるく　麦
夫婦ハ山あらぬ花の笑をうひ　虎
とても利ふうまの　須　礼　蘇

ちぬ日の西よ朱たる初日　振　蘇
あ流よぬるく雨のまくう　芝
のこれぬ中余ふうまぬ冬ぬ　麦
茶たく後ふ松ハ表とうち　芳
寒牛の松の節よむ老のうん　蕉
きしぬ山路とるかすこのせて　虎
言るうう寺弘ん返る高牧　芝
をく死の後よをとること　蕉
ひけふきや月ふ伏うく人もうれ　芳
茨色のいとれと弥うの牛　振　麦
おもひ切う流ふうふこうの　虎
白ひとる紙きよ　ひとふく　蘇

名月の花うしとゝとてわと留

名月よふもとの宮中四代の月り
ゝゝ宵さへ　斗一後又山ふかくれて
蓼蕎麦はけすくゝ花てもてれす山路邦
山雀のゝこゝやらて竹　高の稲　斗龍

俳諧集　　蕉

松茸やゝらめ天竹まぶの八りつた
秋の日　和ハ雲てかゝと十ゝ　文代
春の月　行原の道を中行る　文考
ゝゝゝしハらけて郷のうり家　雪芝
四五人て雲くゝ紙三ゝふ紙を文　猿雖
きりゝし詰よ鞠成墨ゝ　望翠
今朝の雪ゝ　ゝうもたつゝと　惟然

下ノ八十三

扉風たくんて脇をさるゝ　卓袋
雲くしよ上加茶のゝうさねと　代
雲ゝの流ゝそうの会さる　考
蘭ゆゝ蒲雲のうへの乱雲さるく　芝
田よるゝうゝる八ゝの一面　雖
いゝゝ紀解ゝもへと素屋　翠
三年立てと流よゝのふゝ　蕉
庭雲の白ゝゝい人ゝ立ゝ　袋
鼎ゝも果ぬ佛ゝのうゝく　荻
初雪の恒のふる井結ゝし　然
通ゝゝらゝぬ方の紙ゝ　代
ゝゝゝゝ紙なのふるの佛ゝ　袋
春ゝ谷へもを屋ゝ入り　考
年切のゝさい新ゝ角とへ　雖

居風呂の湯のうち加ケんとれ　一
二三が升切りたれハかゝるとも　考
雲家の焼茄子から人番小屋　蕉
酸ふれて松ふたる笠の孫　雖
花ことつしつこと附ーーあり仙　蕉
味噌賣のなりしに名伝て　代
本路成盗よりたとの上にくり　袋
あつ明よ本家の秋と麿仕立　鮫
加こ細このこんさる蕗ーーー子　
この秋ハ懐の脱とわつゝひて　蕉
伝と俗とのの発の発あり　盟
呵るほどよう　樊付ぬ竈の下　芝
芝切入て馬屋背ける　考
くれさむと行狙山のいこ夜　雖

若の日向よ屋のきくを　代

俳諧集

秋の扶成ちも岩ーーたる嘲扑　芭蕉

为ものほとい蒲岩身岩　車庸

西の己二これ三雑雁ゐて　洒堂

ひうゐる牛のよく動くく　游刀

男の名ちんやと呼ふ性若　諷竹

小細成生ーて麻たる夫し　椎然

使やる変をこゝとおこゝとれ　支考

うても医者のこ薬仏ゝ　蕉

拭ひ立恵しの拭さらしと　庸

考て揺ゐる奔尚の　挽堂

紀ゝり恵谷ゐけて蕎ゐり　刀

すきこゝふくい飛いこらなん　考

麻のこぬ板に布貼う百ぢ損　然
西瓜の角よ細よ川辺庸
大蛇とて薬師とする淮う嶋　焦
七種まてはよろつ隠かき　刀
えせ馬の若蘇の苗ぬやうに　堂
小屋形ふる岡金枝の　春　然
密柳の色
松風よ新酒をさまんあを郭　支考
角もうさふく石垣の　上　猿雖
町の角迫ふて麻の花とえて　芭蕉
きてい活衣の裾を引る　雪芝
世日ふおはえを小引つうと　惟然
はふうてはくさ夜まの　皇袋
麻相ふる茶張の風い切かう　望翠

下八分九

麻て天宗弦ふそ刺　考
表比を備しは陶の縫をまた撰　雖
唱花の中城を隠よ引のけ　芝
仕合ふ夫撰の糸と寄ふ　蕉
あふけと麻の結れ結つる　翠
せうしと活ふと雑つ花とて　袋
大江家根屋の帰るられこ　然
用のある時いうけ巡殿ふり　考
雨の降る日の節句ゆるやう　芝
きハ墨弦墨垂てもれ引　袋
親ふらふ字をきふて歳　秋　考
月新よ又ふう返すせめ表仏　翠
借りたふふんの跡の冷やう　雖
咲花よ毎年ふかと連詰　然

陽炎うけてほそ枝ひくく
幸と籠のはしめれ雛るうちて　芝
内侍の笛をはるたるあいろ　考
遥恒の門のさしかくさに　雖
一星の舟も脇のすくたる　翠
山ざくら蜜掛の色の黄にかりて　蕉
瓦ふれてかくる留の高　考
毋才に離をて為のもれ淋し　芝
嵐の紙る巻　巻菓の中　袋
傍紫の製を結ひあ撥の雨　雖
さうふ出をほと消い淳くり　芝
小倉とハむりひ合せの下れ寒　然
七夕の風ふく人死のある　考
永夏を千日寺の粥喰て　蕉

蘭うけ足弱の雪ふ埋れる　雖
やうしに今ハ流るみ沼根　翠
加減のこうりうめうと飛　蕉
濾紙をまうけてられ寒たみ　考
こほれて生る新の部けし　袋
朝ゆふの茶湯ちうと月の業　雖
何ハ沢水ふ生のにやにく　芝
枯もせをふるともふ補の枝　袋
力えよいつも造俳せるく　考
弩もゆうしとする秋の風　翠
淡の小家をとうる寄　然
懐ようもしく重くうけ狀　袋
いてきの爾ふ白ち鶏煮る　考
雪塀の窗ようのうく花の枝　雖

根岳にしひ[illegible]雪のふく　芝

刈残や白髪ひろけるる栗のいが

ふるうて

菊の香やふるくる小古祝傳達

ひいと吹風に名無し一枝の麻

くくかり洗

菓の番よりかりかる節句部

菓よ出てふくとふる蕊方表

芭蕉

ことし

外　雲てる列かりかる方えうれ

秋のあらしに奥ふかれる　旺止

菓のある野ハ刈跡花咲て　惟然

下八七

松風の形代ふるふられて

松風の形代ふるうて秋ふれぬ

菓の蕊

園女亭

芭蕉

ふる菓の目ふ立てる蕊も

紅菓よあるとふる新方　園女

冷しと朝の汁をわるげて　諷竹

仏ともせとよ年ハられり　渭川

小禊よ座右の弦ハ嫁ひらう　支考

ふやとをちりて忘しの核　惟然

あらたまる粹ふ小張たてる　洒堂

紬ふさくらう親の名代　舎羅

恒越したちるとたらの礼ふて　何中

晉清の内い小屋て大茂葉　蕉
帰らぬよ極さる蛙の声を国
酒買うふて飯早稲の搗初　竹
られしと月の出うる板の東　川
板引たる町南の秋　考
られたち涙うら通る所義然
彼岸のぬくさとられてかさうら堂
青芝おまよもへうふたの花　蕉
出代り時のまを歩たしるむ　中
通ひ法を撲ふるうねい送へた　竹
去くらにおおす奥の庵　挺川
おうしとうとうたてた手の笠　堂
雪のくしの小ふまる風屋
紫壹よ隣の月うも連れ世　考

非かるさ九のとちうし松のうせ　之道
味うた鴨のさ影うも伝さ月　丈草
月次すしてえまうたうる家の業　乙州
笑ううに竹の林やううさくい　惟然
丈井うう鶴を拓うん時の考　其角
蛙沖
うつくすう業の下れ宝うれ　丈草
笑うう月で次のうへ出ス宝ふ　支考

追加

公羽脇句

○[illegible]雪[illegible]今の[illegible]くりうれ　朝業

一つのね[illegible]　秋風

○我さく〳〵[illegible]枇杷の[illegible]

えようこく[illegible]　の　花

○月花を両のなもとの[illegible]　露沾

蛙のこうしよ[illegible]入る　声

○[illegible]衣[illegible]苗に[illegible]む会[illegible]ん　貫良

淺[illegible]の[illegible]めやめ[illegible]

○[illegible]山の雪　會覺

板の[illegible]りとこ〳〵　三日月

○[illegible]世[illegible]や[illegible]旅[illegible]の畑　惟然

どの[illegible]を[illegible]夕[illegible]

○秋の[illegible]の[illegible]　不因

萩よ森[illegible]　萩よ森[illegible]

○芽[illegible]　[illegible]実　文章

畠のちよかく[illegible]の花

○いろ〳〵の名も[illegible]　珠碩

うたれて[illegible]の[illegible]ぬる

○[illegible]あつま路や[illegible]五三日　加生

[illegible]すて[illegible]の[illegible]

○[illegible]や雨[illegible]萩の[illegible]　雪芝

[illegible]すところに[illegible]

○芭蕉[illegible]　李下

月ともこゝち[illegible]の[illegible]食

○[illegible]人西行[illegible]秋[illegible]　雷板

[illegible]紙と[illegible]人風の破[illegible]

○花の咲多ゆらそのそれうれ　勝延

秋うゝ咲うくゝ蓮のくゝまとれ

○咲のさくて普拾ゝ木ふれ　嗒山

為よ蕎の　　に十一

○やゝうに樊よ今しとけ姿　露川

田植くくもゆ稲の初　記

○我もそれよ梅よう実は殺つ花　雅良

茶の湯よのうか雪れゝよう

○蕎ささ稲ぬ蛇や花ぬ　如行

古人やうの枝のこうし

菓粽二月ば巳の鳩や夕涼　曲翠

ゆうるゆゆ蛍ゆゆいちとれの花

○茶茶茶の傳もけやけ大根　許六

茶さゝ茶花る松茶の猿

○茶風や麦の中ゆくまつのおと　木聲

かけろゝいさむ花のいと　口

○きろゝてゝ茶せゝ為田植唄　巳百

笠あゝためん不破の五月雨

○れく庭もふくてゝ木の梅　露川

小春よ首のうとくゝのむし

○時雨てや花さてゝる拾生　園女

常ふさてゝ山茶とひろゝ州

○拙なくて白ふし　橘今之日　湖春
東の云の　上蔵　素　つく　蕉
巣の中ふ蓋の二月の並いみて
○雨こそれて栗の花さく　桃雪
いつれのそこに時　蔵る　蟬　等躬
夕鋼うく　鳥　面よ有出て
○蓍やう　鳥のふらひ　草　等躬
市のふくものそこた　曽良
月表こそ　鳥ふらう　添て
○長系　蟬　蟬　三ヶ　利牛
うちくしやく　紙の　盛水
蓍　つ　葉の　切　て
○花のかけ　花　荷兮

下ノ本

物　蟬　掃　庭の　けく　法拙
七夕の八月いもく　くて
○年　すれ　蓋　もれ　花　ん　洒堂
孫　の　せた　芭　の　木　拙　蓋堂
青の　月　人　宿　て
○拙　拔　ひ　け　る　夷　去来
捨　り　る　た　そ　れ　許六
ひ　に　孫　る　風　呂
○蓋　ち　蟬　さ　れ　一　添
二人　て　い　さ　大　る　凡
蔵物の　庶　の　れ　て　よ　て

さらけつる

秀しと名月の夜や茶臼山　桃青

肌寒しとてもりそ　秋る　立圃

秋の夜のそれ句ひつる麝香ゝ

ほうろく買たる夜や　青

かくはうそのかたの高徳舟　圃

久へも一日　輝の如く　推青

宵あつと五重往出る家童子　圃

老ハそふし十会とまり　青

水仙のさうとつくる神去方　圃

松縄ふる常盤ゆうり　青

登られぬ大内山の后う孫　圃

西ゝらしと　鄭ゝ少　青

おうそのは風はまくる川波り　圃

下ノ巻四

秋ゝてさ一西ゝ　青

秋ゝて畑は他るゝ茄子　圃

花火とはして星ゝ　青

傾城と撲の中ゝ紙の方　圃

狐の歩ゝく足も根ゝ

奥筧寺と云ハそ醒記　青

附木賣ゝて雪る白　雨圃

松袋の紅花に徒たるゝ竹　青

沙石を漬てゝ不可思議　圃

精進ゝ延ゝ煙ゝ　青

都ゝ　る江戸の舟　圃

三ッ踊くむ老の姿も志賀ゝ助　青

ゝけしと戸を抑く風呂　圃

布袋ゝ弥勒其の化身ゝ　青

鯉のうろこい三十六負　圖

仙人よ来る事もう孔雀の尾　青

その糸しいと紅木綿菊　圖

むらさきのようてことの郭行けい

山川ささとうれ人よ多人　書

みちのくれよ川のるもこころあれ　圖

かく捨し世と惟いろ人亥　青

花も名よるるこふ加茂を歩反　圖

能てし色ようこ砂の松　筆

松鳴撰吟

松のこれ名反こふ来る序こ紅　翁

物干の涙を知とり　蓼

凡市日のちろしようつろへて

有行これい諸よ備たり

磯い唯あるすし丸牌紅葉

世とて楽山子を居し実守

ころしもや庭の湯めるくあり塔

霜ふうけ出の爰ふろを　之

一備ようこふのら吋森の中

との町しくて清るはたるそ

そしよ乳の、く弟の吋ゆ

名もおき川とよ萱流れて

れこて接ととこ藤ふと石の声

有よ思ひといとへ面ろ

かくまての広い君のれのやま

仏の水ささくく芋　堀

花あれい独さ秋さの住所
蝶 春へとてう所の移に芝
陽 おくの移うあるに紀離れ安
仇帳よりなれいまさのをかりうり
得いそぬい住よりひいるい懐を
よを君世よむをくくるふし
うをををしに対しの勢に交れを
ふくりし心を返下を 児
麻芝や何やら妹し芝れ方
紀系の独よ住し稲 法
馬場頭の木程あれ小実績
接皮を積ようむしへ私に
朝もうひ紀貫之すりて
類一行り移行 ようう

ようひ、をくのけまくえ春芝花
屋のお後い眠をかなる
系の弱おりれうかけふうう
吹雪の油をふるくえを
松外の眞加を買人々くの市
暦巻たるあうつきれ 霜